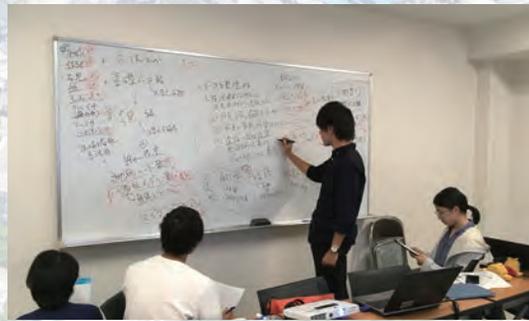


平成30年度
学部学生による自主研究奨励事業
研究成果報告書

遺跡の「解説看板」から探る 情報発信の現状と展望

—「百舌鳥・古市古墳群」の世界遺産登録に向けて—



大阪大学文学部考古学研究室
2018年度学部学生自主研究グループ

平成 30 年度

学部学生による自主研究奨励事業

研究成果報告書

遺跡の「解説看板」から探る 情報発信の現状と展望

—「百舌鳥・古市古墳群」の世界遺産登録に向けて—

大阪大学文学部考古学研究室
2018 年度学部学生自主研究グループ

第1章 研究の概要と経過

第1節 研究の目的

大阪府堺市、羽曳野市、藤井寺市に所在する「百舌鳥・古市古墳群」では現在、世界遺産登録に向けての活動が推進されている。日本最大の前方後円墳である「大仙陵古墳」をはじめとした多くの巨大古墳に加え、その周囲をとりまく中・小規模の古墳からなるこの古墳群は、学術的価値はもちろんのこと、地域社会のなかで親しまれてきた地域のシンボルとしての価値など、多くの意義をもっている。こうした古墳をはじめとした遺跡の重要性を、遺跡の見学者に発信する主要なツールのひとつに、遺跡の「解説看板」がある（図1）。遺跡自体の基礎的な情報や、遺跡がつくられた時代の社会状況についてなど、関連する歴史的背景についての内容が記載される解説看板であるが、説明文章のフォントデザインや図・写真の多寡、看板自体の材質など、モノとしての看板のあり方は、それぞれの遺跡によって大きく異なっている。

世界遺産登録を目指す動きのなかで予想されている、多言語化などの課題もあるなかで、どのような解説看板が見学者にとってわかりよいという印象を与えるのか、ARなど最新技術との親和性はどの程度認められるのかなど、解説看板のあり方そのものに立ちかえって悉皆的に検討するような研究は、AR・VRなどの技術活用については、検討などが深められているが（奈良文化財研究所2016『デジタルコンテンツを用いた遺跡の活用』平成27年度遺跡整備活用研究集会報告書）、特に解説看板のあり方に着目した者はこれまでほぼなされていないといえる。

そこで本研究では、現在設置されている解説看板の集成・分析を出発点として、どのようにすれば遺跡の意義・魅力をより良いかたちで発信することができるのか、その将来的な方策を検討・展望の提示を目的とし、1. 解説看板基礎データの収集、2. 獲得データの整理と分析、3. 研究成果の総括の各作業を実施した。（赤木）

第2節 研究の方法と経過

1. 解説看板基礎データの収集

本研究において最初の課題であるのは、分析の主対象である遺跡解説看板にかんする基礎的な情報をいかにして収集するかという点であった。現地に設置された看板は、インターネット上などで紹介されていることが少なく、ごく



図1 遺跡解説看板の例



図2 調査の風景

一部について歴史ファンの私設ホームページに写真が掲載されている程度である。その場合でも、多くは遺跡そのものの訪問記が主体であるため、看板にかんする詳細な情報を得ることは難しい。本研究で実施する解説看板についての分析では、後述のように看板それ自体の設置されている位置や、周辺の状況などといった付随的な情報も不可欠なものであった。そこでまずは、分析に足るだけの十分な基礎データ蓄積を目的とし、複数回のフィールドワークを実施した(図2)。フィールドワークの対象となる遺跡の選定については、一度のフィールドワークでなるべく多くの資料を得られることと、古墳に限らず複数種の遺産を含めることでより普遍的な傾向の抽出が可能になるようにすることを旨とし、研究メンバーの話し合いに

よって行った(図3)。

対象遺跡の選定の後、現地における具体的な作業内容について検討を行った。基礎データの収集方法については、研究メンバーで話し合いを重ねた結果、チェックシートを用いた方法が適切であるとの結論にいたった。ただしその詳細な項目については、実際に現地でフィールドワークを実施する中で変更・加除すべきものがいくつかでてきたため、適宜バージョンアップと、欠落した項目の補足調査を行った。

以下具体的な調査方法の詳細と調査研究の経過について述べる。

(岩朝)

(1) 具体的な調査の方法

解説看板の調査に際しては、看板の種類別に調査方法を変え、効率的な情報収集を目指した。

①一般的な解説看板(遺跡の名称記載以外に遺跡に関する説明文を持つもの)

…チェックシートの記入・写真撮影(正面・裏・左横・右横・斜め・隣に別の看板がある場合にはその位置関係が分かるアングル等)・地図に場所記入をおこなう。

②そのほか(遺跡の名前のみ、「△まで～m」といった案内表示)

…写真撮影(基本は正面のみ。文字などがある場合はその面も追加)・地図に場所記入をおこなう。

(2) 項目ごとのチェックシート記入法

チェックシートの内容は、下記の項目を設け適宜記入を行った。

看板の大きさ…遺跡に対する解説が書かれたパネル部分の法量など数値を記入。

看板までの高さ…パネル解説部分までの高さの数値(センチメートル単位)を記入。傾斜がある看板については看板までの高さのほか、傾斜が一番高い部分(高部)についても記入。

文字の大きさ…解説文の文字サイズ(何センチメートル四方)か記入。

言語…タイトル部分と説明部分の両方について使用言語を記入。

整備状況…良好・普通・不良の三段階で記入。

- ・良好…汚れなどがほとんど確認できないもの。
- ・普通…多少の汚れなどがあっても見ることに支障がないもの。
- ・不良…汚れなどによって、見ることに支障がでる可能性があるもの。
- ・そのほか、汚れの種類など状況に関する自由記述。

看板の形状…板状・柱状・置石状(石の本体に看板パネル取付)などを記入。

地図…看板が遺跡に対してどの位置にあるかを地図で記入。

備考…その他記入すべき事柄について記入。

調査対象の遺跡とフィールドワークの実施日時、各回の参加者については表1のとおりである。

(神崎)

2. 獲得データの整理と分析

上記のようにチェックシートを用いた基礎データの収集を実施したうえで、つづいてそのデータの整理と各種分析を実施した。

写真をのぞく基礎データは原則として紙媒体で収集したため、まずはデータの下処理として入力作業を実施した。この作業はフィールドワークと並行して行ったため、データ処理およびミーティングの過程で、新たに補足すべき項目やチェックシートのツールとしての利便性向上が求められることになった。そのためチェックシートのバージョンアップとともに、補足調査を適宜実施した。

チェックシートの基礎データの調整が終わった後、収集したデータをもとに、分析の柱となりうる着眼点について、研究メンバーで検討した。検討の結果、①看板の視認性、②看板に掲載されるコンテンツ、③AR・VRなど先端技術の利用状況、④看板そのものの立地状況、の4つの点に絞り込み、研究メンバーで分担しての考察を実施した。分担については下記の通りである。

- ①看板の視認性
- ②看板に掲載されるコンテンツ
- ③AR・VRなど先端技術の利用状況
- ④看板そのものの立地状況

3. 研究成果の総括

各人による分析の結果を突き合わせ、最終的な研究成果の総括を実施した。研究成果の詳細については第3章にゆずるが、研究のなかで各自が気づいた点、将来的な課題などをあらためて整理したうえで、課題実践として古市古墳群・野中古墳を中心としたケーススタディを試みた。

表1 フィールドワーク対象遺跡と参加者一覧

日時	対象	参加者	チェックシート枚数
8月21日	百舌鳥古墳群(1)	赤木・岩朝・神崎・我妻	35枚
9月13日	百舌鳥古墳群(2)	赤木・岩朝	19枚
9月13日	佐紀古墳群	神崎・我妻	12枚
9月15日	古市古墳群(1)	岩朝・我妻	15枚
9月16日	姫路城	神崎・我妻	20枚
9月17日	古市古墳群(2)	赤木・岩朝	11枚
9月19日	石見銀山	赤木・岩朝・神崎・我妻	17枚
9月20日	出雲市周辺遺跡	赤木・岩朝・神崎・我妻	2枚
9月22日	百舌鳥古墳群(3)	岩朝・神崎	4枚



図3 ミーティングの風景

研究を実施するにあたっては、研究計画の調整、研究進捗の中間報告ミーティングなどを適宜実施した。実施スケジュールは下記の通りである。

- 7/4…第1回（研究計画の具体的な調整）
 - 9/27…第2回（進捗報告と分析方針の確認）
 - 11/9…第3回（進捗報告と分析方針の確認）
- 上記のほか、適宜小ミーティングを実施。

第3節 本書の構成

本報告書ではまず第2章において、各遺跡（群）における遺跡解説看板の基礎データとその傾向について述べる。次いで第3章では研究メンバー各人による分析の成果を掲載し、第4章では研究成果全体の総括および展望の提示、ケーススタディの実践を試みる。

(我妻)

The figure displays two examples of checksheet entries for '解説看板' (explanation signs). Each form includes the following sections:

- Header:** Site name, date, and time.
- Material:** Selection of materials like glass, stone, wood, etc.
- Dimensions:** Fields for sign size, height, and width.
- Language:** Selection of languages for the sign (English, Chinese, Korean, etc.).
- Status:** Selection of the sign's condition (good, damaged, etc.).
- Remarks:** A section for hand-drawn diagrams and notes. The left form shows a diagram of a sign with dimensions and the note '看板が1/3' (Sign is 1/3). The right form shows a diagram of a sign with dimensions and the note '龍神天宮跡の看板 (幅約1.5m x 高さ約1.2m)' (Sign at Ryūshin Tenmijūko (width approx. 1.5m x height approx. 1.2m)).

図4 チェックシートの記入例

第2章 調査対象遺跡の解説看板概要

本章では、研究対象である遺跡看板について、フィールドワーク対象遺跡の概要とその看板の状況、看板の具体的な例について述べる。記述の対象であるのは、①百舌鳥古墳群、②古市古墳群（羽曳野市域）、③古市古墳群（藤井寺市域）、④平城宮・佐紀古墳群、⑤姫路城、⑥石見銀山である。

第1節 百舌鳥古墳群における遺跡解説看板の概況

1. 対象遺跡の概要

百舌鳥古墳群は大阪府の堺市に所在する古墳時代中期（5世紀）を中心とした古墳群である。日本最大の古墳である大仙陵古墳をはじめ多くの大型前方後円墳を含む。本節では当古墳群にみとめられた解説看板の状況・傾向について説明したあと、調査した中から具体的な例を二つ選び、その基本的なデータを記す。

2. 遺跡解説看板の状況と傾向

百舌鳥古墳群を対象とした調査では、約9種類の看板を確認した。中でも枚数が多いものが、2017～2018年に堺市によって設置された同一規格の看板で、21枚確認できた（以下、堺市同一規格看板と呼称）。これらの看板が比較的最近に設置・改修されているのは、このたび百舌鳥・古市古墳群が世界文化遺産の国内推薦地となったことと関係していると考えられる。基本的に、古墳群中の主要な古墳すべてに設置されており、一基につき一枚がおかれている。

そのほかの種類の見板については、素材・形状・サイズなどはさまざまである。看板種類ごとの数は少なく、それぞれにつき1～3例ほどであった。堺市同一規格看板の設置に伴い、古い看板の多くは撤去された可能性がある。今回確認した看板の中で最古のものは、1991年に設置された金属製の古墳解説看板（御廟山古墳）であった。

堺市同一規格看板の特徴をまとめると、以下のとおりである。

堺市同一規格看板（2017～2018年）の特徴

素材：プラスチック **看板サイズ**：縦90cm×横120cm

地上からの基本的な高さ：傾斜なし＝約85cm、傾斜あり＝底部約55cm 頂部約120cm

傾斜を持つ場合の角度：約45度 **文字サイズ**：縦1.5cm×横1.5cm **文字色**：黒

他言語対応：タイトルに英語、中国語、韓国語 説明に英語

専門用語：場合による（ある場合も、漢字から意味を読み取れるもの、その用語に関する説明がなされているものが多い）

図：基本1枚 **写真**：基本0～2枚 **背景色**：白 **遺跡に対する看板の向き**：外

整備状況：良好 **形状**：板状 **設置年度**：2017～2018年度

備考：上部には百舌鳥古墳群にちなんで、反正天皇陵、仁徳天皇陵、履中天皇陵を海から見たものであろうイラストがデザインされている。

3. 代表例

上述した堺市同一規格看板の一例と、1994年設置の看板の一例をあげる。

①ニサンザイ古墳（図5）

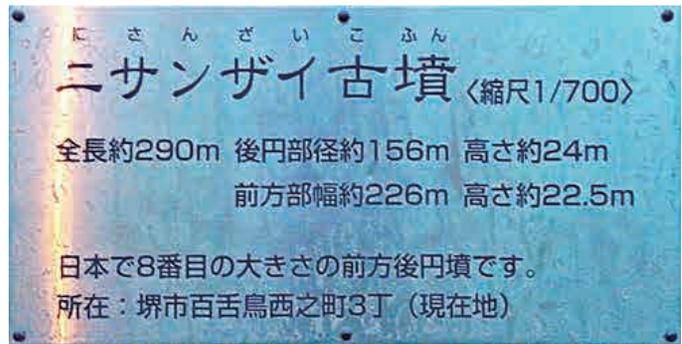


図5 遺跡の解説看板（百舌鳥古墳群①）



図6 遺跡の解説看板（百舌鳥古墳群②）

設置場所：ニサンザイ古墳前方部（公園内） 素材：プラスチック 看板サイズ：縦90cm×横120cm

地上からの高さ：底部50cm 頂部115cm 角度：45度 文字サイズ：縦1.5cm×横1.5cm 文字色：黒

他言語対応：タイトルに英語、中国語、韓国語 説明に英語 専門用語：なし 背景色：白

遺跡に対する看板の向き：外 整備状況：良好 形状：板状 設置年度：2018年（3月）

備考：標準的な堺市同一規格看板の一つ。堺市同一規格看板は基本古墳一基につき一枚だが、この古墳では例外的に二枚設置されていた。御陵山公園内部につき、人が集まりやすいと考えられたためか。

②御廟山古墳（図6）

設置場所：御廟山古墳前方部 素材：金属 看板サイズ：縦50cm×横95cm 地上からの高さ：95cm

角度：90度 文字サイズ：縦1.0cm×横1.0cm 文字色：黒 他言語対応：タイトルに英語

専門用語：あり（説明つき） 背景色：白 遺跡に対する看板の向き：外 整備状況：普通

形状：板状 設置年度：1994年（10月）

備考：植え込みに埋もれかかっている上、素材の金属が周りの風景を反射するため見つけにくい。わずかに文字がはげかかっている。塚廻古墳のものなど同一規格と思われる。御廟山古墳にはこの看板のほかに、堺市共通規格の看板もある。

4. 所見

百舌鳥古墳群に設置された看板の多くは、比較的整備状況がよいものであった。しかし、規模が小さい、もしくは他の古墳から離れた場所にある古墳では、世界文化遺産の候補地に含まれている場所でも、看板が設置ないしは整備されていない、もしくは発見がきわめて難しい場合もみとめられた。

第2節 古市古墳群（羽曳野市域）における遺跡解説看板の概況

1. 対象遺跡の概要

古市古墳群は、古墳時代中期（4世紀後半～6世紀前半）にかけて、現在の藤井寺市から羽曳野各市にかけて築造された古墳群である。前述の通り、堺市の百舌鳥古墳群と合わせた、「百舌鳥・古市古墳群」として世界遺産登録に向けた活動が近年活発化しており、2019年のユネスコ世界遺産委員会での登録が目指されている。この節では古市古墳群のうち、羽曳野市に属する古墳の遺跡解説看板について記す。

2. 解説看板の状況と傾向

現地調査により、3種13枚の遺跡解説看板について計測・撮影およびチェックシートへの記入を行った。調査に用いたチェックシートは第三版である。

遺跡解説看板の大部分にあたる10枚は、羽曳野市教育委員会の設置した同一規格のもの（以下羽曳野市規格と表記）である。その他に、コンクリート製の土台にタイルが貼られたものが2枚、ルート案内を兼ねた大型のものが1枚存在する。

遺跡解説看板の設置場所について、古市古墳群においては、古墳の多くが住宅等で囲まれているため、方角や古墳各部位との位置関係とは関係なく、公道に面した場所に設置されている傾向が強い。

3. 代表例

①向墓山古墳（図7）

設置場所：向墓山古墳北 素材：プラスチック 看板サイズ：75 cm×75 cm 地上からの高さ：60 cm

角度：なし 文字サイズ：1.2 cm×1.2 cm 文字色：黒 多言語対応：英・中・韓（中・韓はタイトルのみ）

内容：フリガナ・専門用語・図1枚・写真1枚 背景色：薄緑 遺跡に対する看板の向き：外

整備状況：良好 形状：板状 設置年度：不明

備考：蜘蛛の巣付着、ドローン映像QRコードあり。羽曳野市規格の遺跡解説看板の特徴通り上下の緑の枠に薄緑色の背景を持つ。遺跡の説明について文章と図や写真を用いて表されているほか、ドローンの映像が見られるQRコードが添付されている。

②峯ヶ塚古墳（図8）

設置場所：峯ヶ塚古墳前方部東 素材：タイル（外側：コンクリート） 看板サイズ：60 cm×60 cm

地上からの高さ：68 cm 角度：45度 文字サイズ：1.2 cm×1.2 cm 文字色：黒 多言語対応：なし

内容：フリガナ・専門用語・図1枚・写真1枚 背景色：白 遺跡に対する看板の向き：外

整備状況：良好 形状：板状 設置年度：不明

備考：表面に傷、縁削れ。峯ヶ塚古墳自体から少し離れた高い位置に設置されている。そのため気づかれにくいと考えられる。コンクリート製の45度に曲がった外枠に白いタイルが貼られた形状の遺跡解説看板である。

③白鳥陵古墳（図10）

設置場所：白鳥陵古墳前方部北 素材：プラスチック 看板サイズ：89.5 cm×150 cm

地上からの高さ：94 cm 角度：なし 文字サイズ：1.4 cm×1.4 cm 文字色：白 多言語対応：英

内容：フリガナ・専門用語・図2枚・写真2枚 背景色：濃緑 遺跡に対する看板の向き：外

整備状況：良好 形状：板状 設置年度：不明

備考：ドローン映像QRコードあり

白鳥陵古墳前方部の北側にあたる遊歩道沿いに設置されている。大型であり、白鳥陵以外の周辺古墳についても各々1文程度で解説がなされている。上方に向けて外側に開く特徴的な形状をしている。



図7 遺跡の解説看板(古市古墳群①)



図8 遺跡の解説看板(古市古墳群②)



図9 遺跡の解説看板(古市古墳群③)



図10 遺跡の解説看板(古市古墳群④)

4. 所見

羽曳野市規格の遺跡解説看板が多数を占めているものの、羽曳野市規格内での看板サイズや文字サイズが細かく分化している点が羽曳野市の遺跡解説看板の特徴であると言える。看板サイズに関しては特にばらつきが見られ、長方形のものだけでなく正方形をしたものも存在する。また、ドローンからの映像が見られるQRコードが付いた遺跡解説看板も複数あり、看板における記述だけで完結するのではなく、スマートフォンなどのメディアを通じた追加要素を付与している点は注目に値する。

第3節 古市古墳群(藤井寺市域)における遺跡解説看板の概況

1. 対象遺跡の概要

本節では上記の古市古墳群のうち、藤井寺市に属する古墳の遺跡解説看板について記述する。

2. 遺跡解説看板の状況と傾向

現地調査により2種13枚の遺跡解説看板について計測・撮影およびチェックシートへの記入を行った。調査に用いたチェックシートは第三版である。

遺跡解説看板の大部分にあたる12枚は藤井寺市教育委員会が2016年に設置した同一規格のもの(以下藤井寺市規格と表記する)である。その大半は看板の大きさが90cm×120cmであるが、例外的に2枚は70cm×90cmのものも

存在している。残りの1種類は2014年設置のプラスチック製の看板である。遺跡解説看板の設置場所の傾向については、おおむね羽曳野市と共通している。

3. 代表例

①津堂城山古墳 (図11・12)

設置場所：津堂城山古墳後円部西

素材：プラスチック

看板サイズ：90 cm × 120 cm

地上からの高さ：86 cm

角度：なし

文字サイズ：1.7 cm × 1.7 cm

文字色：黒

多言語対応：英・中・韓（中・韓はタイトルのみ）

内容：フリガナ・専門用語・図1枚・写真6枚

背景色：薄緑

遺跡に対する看板の向き：外

整備状況：良好

形状：板状

設置年度：2016年

備考：蜘蛛の巣付着

後円部付近にある神社の鳥居前に設置されている。藤井寺市規格看板のオーソドックスな特徴を持つ。緑の枠が上下にあり、説明部分の上部には古墳の基本データが箇条書きで書かれており、下部に詳細な説明文章が並んでいる。またこの遺跡解説看板自体は写真が多く掲載されている点が特徴であると言える。



図11 遺跡の解説看板（古市古墳群⑤）



図12 遺跡の解説看板（古市古墳群⑥）

②割塚古墳 (図13)

設置場所：割塚古墳北部

素材：プラスチック

看板サイズ：70 cm × 90 cm

地上からの高さ：99 cm

角度：なし

文字サイズ：1.6 cm × 1.6 cm

文字色：黒

多言語対応：英・中・韓（中・韓はタイトルのみ）

内容：フリガナ・専門用語・図1枚・写真3枚

背景色：薄緑

遺跡に対する看板の向き：外

整備状況：良好

形状：板状

設置年度：2016年

備考：QRコードが印刷されているものの、読み取り不可。

割塚古墳の北部に設置されている。①の例で挙げた堺市規格の看板と比べて看板部分が一回り小さい。QRコードが印刷されていたが風雨の影響かぼやけており読み取ることができない。



図13 遺跡の解説看板（古市古墳群⑦）

③鍋塚古墳（図14）

設置場所：鍋塚古墳周辺道沿い

素材：プラスチック

看板サイズ：80 cm×120 cm

地上からの高さ：100 cm

角度：なし

文字サイズ：2 cm×2 cm

文字色：黒

多言語対応：なし

内容：フリガナ・専門用語・図2枚

背景色：緑

遺跡に対する看板の向き：外

整備状況：良好

形状：板状

設置年度：2014年

備考：特記事項なし



図14 遺跡の解説看板（古市古墳群⑧）

鍋塚古墳の道沿いに設置されている。藤井寺市規格のものとは異なり、多言語対応がなされていない。比較的設置年が新しいため、藤井寺市規格に建て替えられなかったのであると考えられる。大きさも80 cm×120 cmであり、藤井寺市規格とは若干異なっている。

4. 所見

藤井寺市の遺跡解説看板は羽曳野市規格のものと比較してより細部まで規格化されている。古いものについては基本的に2016年の藤井寺市規格の遺跡解説看板を設置する際に一新されたと考えられるが、例外として鍋塚古墳のみ別形態のものが残存していた。羽曳野市同様、QRコードを用いている点は特徴であるといえる。

（赤木・岩朝）

第4節 平城宮・佐紀古墳群における遺跡解説看板の概況

1. 対象遺跡の概要

平城宮は、1998年12月に「古都奈良の文化財」として世界文化遺産に登録された遺跡である。平城京の北端に位置し、朱雀門から内裏までの一部が復元されている。

佐紀古墳群は、正式には「佐紀盾列古墳群」と呼ばれる古墳時代の前期から中期にかけて造営された巨大前方後円墳とその陪塚群、中・大型前方後円墳などによって構成される古墳群である。

今回は、一体的にフィールドワークを実施した両遺跡についてまとめて記述する。

2. 遺跡解説看板の状況と傾向

平城宮・佐紀古墳群を対象とした調査では、佐紀古墳群の周辺で見つけられた看板がごく少数しかなかったため、主に平城宮で見られる看板を調査した。調査に用いたチェックシートは第二版である。

平城宮には、解説すべき遺構や遺物が点在しており、看板の数は多いが、互いの場所が遠く、また、同じ規格を用いた看板を、遺唐使船内以外では見つけることができなかった。

佐紀古墳群では、調査を行うことができたのは、2枚の看板のみ、ヒシアゲ古墳と瓢箪山古墳である。設置してあると考えられる場所を時間をかけて探したが見つからなかったため、他の設置看板があったとしても、古墳見学に来た人々も同様に見つけられない可能性が高いといえる。

3. 代表例

①平城宮佐伯門 (図15)

設置場所：平城宮西入り口佐伯門近く

素材：タイル

看板サイズ：縦59.5cm×横59.5cm

地上からの高さ：73cm

角度：45度

文字サイズ：縦2.0cm×横2.0cm

文字色：黒

他言語対応：説明に英語

専門用語：あり

内容：地図1枚

背景色：白

遺跡に対する向き：平行

整備状況：良好

形状：板状のものを柱状につける

設置年度：不明

備考：4枚の正方形の看板を横並びにして設置してある横長の看板である。入口にあることや、地図があることで足を止める人は比較的多い。



図15 遺跡の解説看板（平城宮・佐紀古墳群①）

②ヒシアゲ古墳 (図16)

設置場所：ヒシアゲ古墳

素材：タイル

看板サイズ：上 縦15×横30 下 縦20×横30

地上からの高さ：上85cm下70cm

角度：45度

文字サイズ：縦0.5cm×横0.5cm

文字色：青

他言語対応：なし

専門用語：あり

背景色：白

遺跡に対する向き：外

整備状況：色あせ等

形状：柱状に近い

設置年度：2001年以降

備考：上の看板に「点字」の使用が認められる。内容は、おそらく看板の内容と同じである。タイル地であるがゆえに、茶色にくすんで読みづらい部分が多く、看板が設置されている場所がわかりづらいため、見つかることは少ない可能性もある。



図16 遺跡の解説看板（平城宮・佐紀古墳群②）

4. 所見

平城宮の看板に共通の規格は存在しないが、タイルの使用率が80%を超えることが大きな特徴である。タイルによる看板はきれいに印刷されやすく、日焼けを除くと色の薄れやかすれもないが、衝撃に弱いという特徴がある。実際、今回現地調査をした中には、タイルがひび割れてそこから雑草が生えている看板がみとめられた。

また、対象となる遺構の近くに設置されているため、角度をつけて目線の邪魔にならないような工夫がされている

ように感じられた。

佐紀古墳群に設置されている看板は、瓢箪山のもは一般的に見られる解説看板に近いが、ヒシアゲ古墳のもは異なる形態を呈していた。設置場所や管理の方針によって最適な素材や形状が変わることが予想され、そうした差が看板形態における大きな違いとしてみられるのではないかと考える。

第5節 姫路城における遺跡解説看板の概況

1. 対象遺跡の概要

姫路城とは、兵庫県姫路市に位置する城である。「姫路城跡」として、日本の国の特別史跡に指定されるほか、ユネスコの世界遺産リストにも登録されている。平成の大改修（2009年～2015年）に代表されるように、何度も改修され、地域の観光業に大きく貢献している。

2. 遺跡解説看板の状況と傾向

姫路城に設置されている看板に見られる最大の特徴は、「全体としての共通規格の採用」ではなく、「展示場所ごとの共通規格の採用」である。屋外には、「金色の金属地に黒字の解説がある」場合と、「白背景に黒字の解説がある」場合がある。屋内には、「緑背景に白地の解説がある」場合が多い。

3. 代表例

①菱の門 (図17)

設置場所：菱の門足元付近 素材：金属 看板サイズ：縦40cm×横65cm 地上からの高さ：25cm

角度：27度 文字サイズ：縦1.0cm×横1.0cm 文字色：黒 他言語対応：説明に英語

専門用語：あり 内容：フリガナ 背景色：金 遺跡に対する向き：平行 整備状況：良好

形状：板状 設置年度：不明

備考：姫路城内で最もよく見つかる看板である。もし内容を読もうとするならば、地面から25cmと低い位置に設置されていることから、屈まないと読めないことが問題となりうる。そのため見学者の流れを滞らせないようにするには、かなりの努力を要することとなる。

②ARの看板

設置場所：城内各地全16か所（調査した場所は三の丸）

素材：木・プラスチック

看板サイズ：縦48cm×横33cm

地上からの高さ：外枠49cm内枠57cm 角度：90度

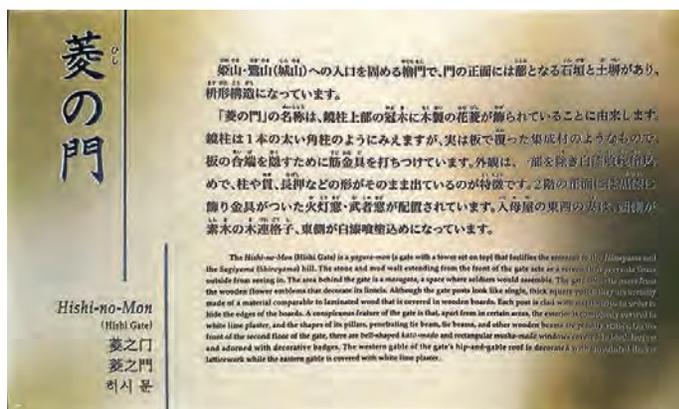


図17 遺跡の解説看板（姫路城①）



図18 遺跡の解説看板（姫路城②）

文字サイズ：図として使用

文字色：黒 他言語対応：なし 専門用語：なし 背景色：茶 遺跡に対する向き：外

整備状況：良好 形状：看板 設置年度：不明

備考：姫路城公式アプリケーション「姫路城大発見アプリ」のAR機能に対応した看板である。手持ちのスマートフォンにインストールしたこのアプリを看板にかざすと、その地点に対応した解説が映像で見られるというものだ。看板自体が大きく、今までアプリの存在を知らなかった人に対しての宣伝という意味での効果も見込めるだろう。実際、かなり活用されていた。

4. 所見

冒頭にも述べたように姫路城における解説看板の最大の特徴は、「全体としての共通規格の採用」ではなく、「展示場所ごとの共通規格の採用」という方針を採っていることである。金属を用いた看板は、「小さい」看板と、「大きい」看板に分かれるが、前者は設置高さの面で、後者は文字サイズの面で、読みづらいケースがみとめられた。加えて、金色に輝く背景は、光を反射するため、文字がかすんでしまい文章が読めなくなるという問題もはらんでいる。

AR看板は、他の遺跡におけるAR・VRの中でもかなり特徴的なあり方を示していた。スマートフォンの普及率が飛躍的に向上した現在、手持ちの端末で確認できる手軽さから、少し立ち止まってデータを手に入れたのち、少し離れた立ち止まっても差支えの無い場所に移動してからその内容を読む見学者も多く認められた。アプリ自体の使用感など、一部に使用上気になる点は残るが、混雑の解消など、コンテンツ内容以外の観点から見ても画期的かつ有効な試みであると評価することができるだろう。

第6節 石見銀山及びその周辺における遺跡解説看板の概況

1. 対象遺跡の概要

石見銀山遺跡は、島根県大田市に所在する。16世紀から18世紀にかけて銀採掘および生産がなされていた広大な鉱山関連遺跡で、2007年7月に「石見銀山遺跡とその文化的景観」としてユネスコの世界遺産に登録がなされている。本研究においては2018年9月18日・19日の両日に赤木・岩朝・神崎・我妻の四名で、石見銀山遺跡周辺に設置された遺跡解説看板の現地調査を実施した。

2. 遺跡解説看板の状況と傾向

現地調査では17種39枚の遺跡解説看板について計測・撮影およびチェックシートへの記入を実施した。調査に用いたチェックシートは第三版である。

遺跡解説看板は概ね住居跡・工房跡・間歩（採掘坑）等の遺構に対して1基以上の設置が認められた。その他遺跡全体の概要を記す解説看板が広場等を中心に少数見られた。同規格の解説看板が複数枚存在する一方、多くは解説の対象となる遺構・事象ごとに看板の型式が異なる。設置年度については記載のないものが大半であったが、その整備状況から近年に設置された看板は一部のみで多くは世界遺産登録前後かそれ以前の看板であると推測される。看板の大きさ・高さ・文字サイズ等については後付の表を参照されたい。

その他石見銀山遺跡に特徴的な傾向として、木材や茶系のプラスチックを用いた木目調の解説看板が多く見られたという点を挙げたい。全17種中11種、枚数にして半数以上の解説看板が木目調であった。世界遺産登録名にも挙げられている通り同遺跡の「文化的景観」がその街並み等において意図的に保存されていることから、解説看板の設置にあたってその景観を破壊しないよう配慮した結果と思われる。

3. 代表例

①龍源寺間歩内部出口付近看板（同型15枚）

設置場所：龍源寺間歩内部通路出口付近

素材：プラスチック

看板サイズ：縦 55 cm×横 80 cm
 地上からの高さ：85 cm
 角度：58 度
 文字サイズ：縦 1.0 cm×横 1.0 cm
 文字色：黒
 他言語対応：説明文に英中台韓
 内容：フリガナ・専門用語・図（1 枚）
 背景色：白
 遺跡に対する看板の向き：内
 整備状況：普通
 形状：板状
 設置年度：不明



図 19 遺跡の解説看板（石見銀山①）

備考：バックライト搭載、落水防止カバー

龍源寺間歩は石見銀山遺跡の採掘坑の

一つで観光客向けに常時入場可能（要入場料）な間歩としては同遺跡中唯一の間歩である。解説看板はその入り口・出口・内部に 4 種 19 枚存在する。ここで取り上げた一連の看板は見学通路の出口付近に 15 枚並べられており、各個に石見銀山に関わる江戸時代の絵図とその説明の記載がある。説明については他言語での記載もあるが、シールにより後ほど追加されたものと推測した。特筆すべき点としてバックライトの搭載と落水防止カバーが挙げられる。バックライトは解説看板の文字や絵の視認性を高めると同時に薄暗い間歩内における照明としても機能していた。また、落水防止カバーは湧水等や結露等で常に湿っている間歩内において天井から垂れ落ちる水滴から看板を守る役割がある。いずれも屋外の遺跡解説看板では確認できない装備である。

②住居跡看板（熊谷家住宅）

設置場所：町家・武家屋敷ゾーン住居跡前

素材：木材

看板サイズ：縦 36 cm×横 51 cm

地上からの高さ：83 cm

角度：90 度

文字サイズ：縦 0.6 cm×横 0.6 cm

文字色：黒

他言語対応：タイトルに英語

内容：専門用語

背景色：木目

遺跡に対する看板の向き：外

整備状況：普通

形状：板状

設置年度：不明

備考：音声ガイドあり

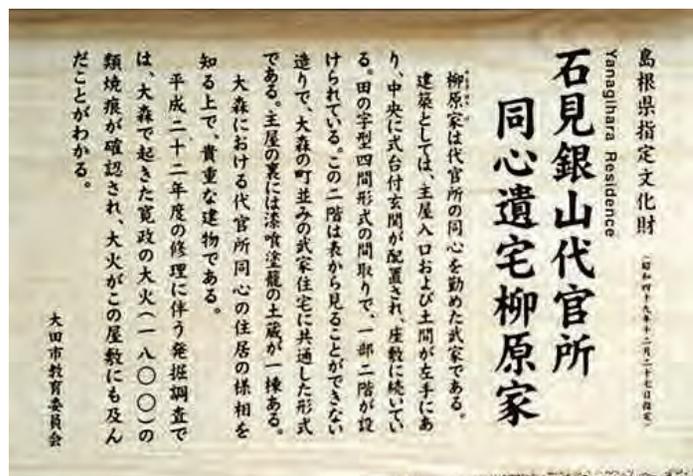


図 20 遺跡の解説看板（石見銀山②）

古くからの街並みがよく残るエリアに設置されている解説看板の中でも最も小さいタイプにあたり、同サイズのもの数が数枚存在する。文字も含め全体的に小さめサイズ・木目調・図なし・筆字フォントなど、随所に景観への配慮が推察される。しかし以上のような特徴は視認性の低さにつながるだけでなく、解説看板の存在に気付きにくくさせるリスクも内包している。景観保護地区における景観保護と情報発信の両立の難しさを実感した。

その他：遺跡の最寄りにあたる山陰本線大田市駅ホームにも遺跡解説看板が設置されていた。



図 22 調査対象とした遺跡の解説看板 2

史跡 葛山古墳 Katsuyama Kofun

高野山南麓の山麓に築造された。古墳の中心部には直径約10mの円形石室があり、その周囲には直径約1.5mの石室が並ぶ。石室の中心部には直径約10mの円形石室があり、その周囲には直径約1.5mの石室が並ぶ。石室の中心部には直径約10mの円形石室があり、その周囲には直径約1.5mの石室が並ぶ。

HAKAYAMA KOFUN (Mounded Tomb)

The center of the mound is a circular stone chamber (kofun) with a diameter of 10m. It is surrounded by a ring of smaller stone chambers, each with a diameter of 1.5m. The chambers are arranged in a circular pattern around the central chamber.



雄略天皇陵古墳 Yuryaku-tenno-ryo Kofun

雄略天皇は雄略天皇陵古墳で崩御された。雄略天皇は雄略天皇陵古墳で崩御された。雄略天皇は雄略天皇陵古墳で崩御された。雄略天皇は雄略天皇陵古墳で崩御された。

Yuryaku-tenno-ryo Kofun (mounded tomb)

The remains of Emperor Yuryaku (reign 502-527) as well as the remains of his wife Empress Suiko (reign 502-527) are believed to be buried here. The mound is a circular stone chamber with a diameter of 10m. It is surrounded by a ring of smaller stone chambers, each with a diameter of 1.5m.



野中古墳 Nonaka Kofun

野中古墳は、葛山古墳の南側に位置する。野中古墳は、葛山古墳の南側に位置する。野中古墳は、葛山古墳の南側に位置する。野中古墳は、葛山古墳の南側に位置する。

Nonaka Kofun (Mounded Tomb)

The mound is a circular stone chamber with a diameter of 10m. It is surrounded by a ring of smaller stone chambers, each with a diameter of 1.5m. The chambers are arranged in a circular pattern around the central chamber.



冨塚古墳 Warizuka Kofun

冨塚古墳は、野中古墳の南側に位置する。冨塚古墳は、野中古墳の南側に位置する。冨塚古墳は、野中古墳の南側に位置する。冨塚古墳は、野中古墳の南側に位置する。

Warizuka Kofun (Warizuka Mounded Tomb)

The mound is a square stone chamber with a side length of 30m. It is surrounded by a ring of smaller stone chambers, each with a side length of 3m. The chambers are arranged in a square pattern around the central chamber.



光武天皇陵 (熊山) 古墳 Koyasu-tenno-ryo Kofun

光武天皇は光武天皇陵古墳で崩御された。光武天皇は光武天皇陵古墳で崩御された。光武天皇は光武天皇陵古墳で崩御された。光武天皇は光武天皇陵古墳で崩御された。

Koyasu-tenno-ryo Kofun (Mounded Tomb)

The mound is a circular stone chamber with a diameter of 10m. It is surrounded by a ring of smaller stone chambers, each with a diameter of 1.5m. The chambers are arranged in a circular pattern around the central chamber.



向臺山古墳 Mukohakayama Kofun

向臺山古墳は、野中古墳の南側に位置する。向臺山古墳は、野中古墳の南側に位置する。向臺山古墳は、野中古墳の南側に位置する。向臺山古墳は、野中古墳の南側に位置する。

Mukohakayama Kofun (Mounded Tomb)

The mound is a square stone chamber with a side length of 30m. It is surrounded by a ring of smaller stone chambers, each with a side length of 3m. The chambers are arranged in a square pattern around the central chamber.



はざみ山古墳 Hazamiyama Kofun

はざみ山古墳は、野中古墳の南側に位置する。はざみ山古墳は、野中古墳の南側に位置する。はざみ山古墳は、野中古墳の南側に位置する。はざみ山古墳は、野中古墳の南側に位置する。

Hazamiyama Kofun (Mounded Tomb)

The mound is a circular stone chamber with a diameter of 10m. It is surrounded by a ring of smaller stone chambers, each with a diameter of 1.5m. The chambers are arranged in a circular pattern around the central chamber.



図 23 調査対象とした遺跡の解説看板 3



図 24 調査対象とした遺跡の解説看板 4

大安寺山古墳 Daianjiyama Kofun 大安寺山古墳 대안정지대 고분



時代 5世紀末
古墳の規模 墳高約2m、直径約2m
古墳の形 円墳

大安寺山古墳は、石室を有する古墳の中心部へ併せつけられたもので、中央部が石室へスカーン状に広がる形に特徴が認められます。竪穴式石室の中心部に石室が設けられることは非常に珍しい、大安寺山古墳の遺跡の重要な特徴と考えられます。

石室を有する古墳は、古墳時代の後半に造られたと考えられています。その中心部は大安寺山古墳の中心部に併せつけられたもので、中央部が石室へスカーン状に広がる形に特徴が認められます。

Daianjiyama Kofun
Period: Mid-5th century
Mound shape: Round mound with stone chamber
Mound size: Diameter: 2 m, height: 2 m

Daianjiyama Kofun is a round mound built as an integral with the middle part of the gigantic stone-chambered Kofun. The mound was built on the left of the middle part that extends out like a spur towards the outer field. The construction of a round mound in a place surrounded between major chambered mounds, such positioning is not seen anywhere except at this kofun but the unique Daianjiyama Kofun.

Special note: In Japan, the largest stupa-like stupa, with a round base of 400 meters. There are many such stupa-like stupa in its vicinity, but of which is the Daianjiyama Kofun.

近畿大学考古学研究所 土佐へび 3m 近畿大学考古学研究所 土佐へび 2m
www.kofun.or.jp/kyoufu/116.html www.kofun.or.jp/kyoufu/116.html

源右衛門山古墳 Genemoniyama Kofun 源右衛門山古墳 권혜문예대 고분



時代 6世紀中葉
古墳の規模 墳高約3m、直径約4m
古墳の形 円墳

源右衛門山古墳は、石室を有する古墳の中心部へ併せつけられたもので、中央部が石室へスカーン状に広がる形に特徴が認められます。竪穴式石室の中心部に石室が設けられることは非常に珍しい、源右衛門山古墳の遺跡の重要な特徴と考えられます。

石室を有する古墳は、古墳時代の後半に造られたと考えられています。その中心部は源右衛門山古墳の中心部に併せつけられたもので、中央部が石室へスカーン状に広がる形に特徴が認められます。

Genemoniyama Kofun
Period: Mid 6th century
Mound shape: Round mound with stone chamber
Mound size: Diameter: 4 m, height: 3 m

Genemoniyama Kofun is a round mound built as an integral with the middle part of the giant stone-chambered Kofun. The mound was built on the left of the middle part that extends out like a spur towards the outer field. The construction of a round mound in a place surrounded between major chambered mounds, such positioning is not seen anywhere except at this kofun but the unique Genemoniyama Kofun.

Special note: In Japan, the largest stupa-like stupa, with a round base of 400 meters. There are many such stupa-like stupa in its vicinity, but of which is the Genemoniyama Kofun.

近畿大学考古学研究所 土佐へび 3m 近畿大学考古学研究所 土佐へび 2m
www.kofun.or.jp/kyoufu/116.html www.kofun.or.jp/kyoufu/116.html

竜佐山古墳 Tatsuzayama Kofun 竜佐山古墳 龍正山古墳 오룡정지대 고분



時代 5世紀後半～1世紀
古墳の規模 墳高約5m、直径約5m
古墳の形 丸型石室付円墳

竜佐山古墳は、石室を有する古墳の中心部へ併せつけられたもので、中央部が石室へスカーン状に広がる形に特徴が認められます。竪穴式石室の中心部に石室が設けられることは非常に珍しい、竜佐山古墳の遺跡の重要な特徴と考えられます。

石室を有する古墳は、古墳時代の後半に造られたと考えられています。その中心部は竜佐山古墳の中心部に併せつけられたもので、中央部が石室へスカーン状に広がる形に特徴が認められます。

Tatsuzayama Kofun
Period: Second half of the 5th century
Mound shape: Round mound with stone chamber
Mound size: Length: 5 m, height of the round part: 5 m

Computed as a National Historic Site on 11 April 2010

Tatsuzayama Kofun is a slightly shell-shaped mound which is a type of tumulus-shaped mound with a stone-chambered part, and one of the earliest sites of the pre-Kofun-period Kofun.

The burial facility and grave goods remain almost. Cherted stones and bronze (bronze) tumulus-shaped stupa, which had been found from the mound surface, have been found at the mound. The structures of the stupa indicate that the tomb was constructed after the completion of tumulus-shaped Kofun as its inner satellite tomb.

近畿大学考古学研究所 土佐へび 3m 近畿大学考古学研究所 土佐へび 2m
www.kofun.or.jp/kyoufu/116.html www.kofun.or.jp/kyoufu/116.html

善右エ門山古墳 (せんえもんやまこふん)

善右エ門山古墳は、いたすけ古墳の後円部と併せて築かれた古墳です。墳高は明らかではありませんが、一辺30m以上、高さ2m以上程度に推定されます。墳高は二段に築かれており、墳頂には石が積まれていたものと考えられます。テラス部分には円筒形柱が2m間隔で立て並べられていました。古墳を周囲から区画する溝などの施設はなかったようです。

埋葬施設や副葬品は明らかになっていませんが、円筒形柱の柱間隔より8世紀中頃に築かれた古墳です。

そのことから、いたすけ古墳の被葬者と関連の深い人物が葬られているものと考えられます。

所市教育委員会



鷹塚古墳 Tobizuka Tumulus

鷹塚古墳は、昭和30年代頃に土取りによって明治時代の資料には、この古墳の大きさは東西約40m・南北約30mと書かれています。

平成10年に行った調査で古墳の真面目なものが発見されました。墳頂の直径約2.4m・幅約3mの円墳で、5世紀後半頃に造られたと考えられます。

この失われた古墳の姿をイメージして模型が造られました。古墳の位置や大きさは正確ではありませんが、古墳の位置や大きさは正確に示されています。

原山古墳 Harayama Tumulus

原山古墳は昭和30年代頃に土取りにより墳頂は失われました。この時に基石と礎石がみつかり、木製の埋められた円墳であることが確認されました。副葬品として包み込まれた鉄製の矢じり(鉄剣)が3本と鉄製の斧、それに土師製高杯が発見されており、古墳が造られたのは8世紀後半頃と考えられます。

明治時代の資料によると、この古墳の大きさは東西約58m・南北約30mと書かれています。平成10年に行った調査では、古墳の周囲に溝がめぐっており、墳頂の直径約2.5m・幅約6mであったことがわかりました。

この失われた古墳をイメージして墳頂の大きさ(ただし高さはない)を記号として、塚は河原路として元の古墳の位置に標示しています。



この地図は、調査対象とした遺跡の解説看板7の位置を示しています。各遺跡の位置や規模、時代などが記載されています。



この地図は、調査対象とした遺跡の解説看板7の位置を示しています。各遺跡の位置や規模、時代などが記載されています。

図27 調査対象とした遺跡の解説看板7

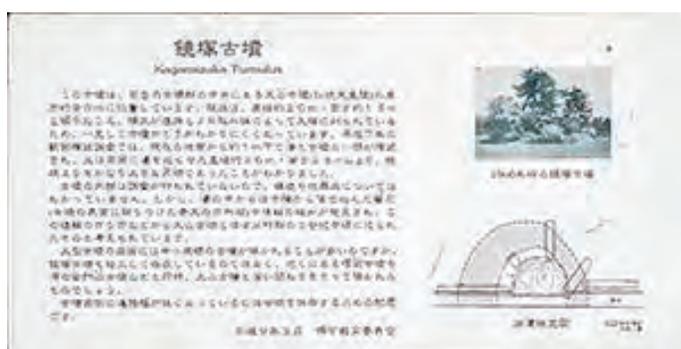
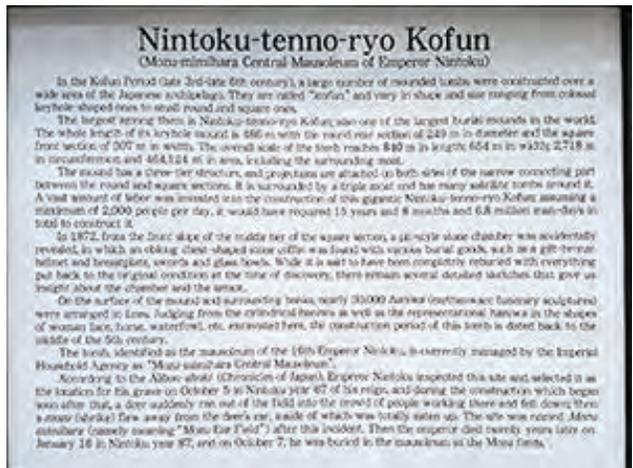
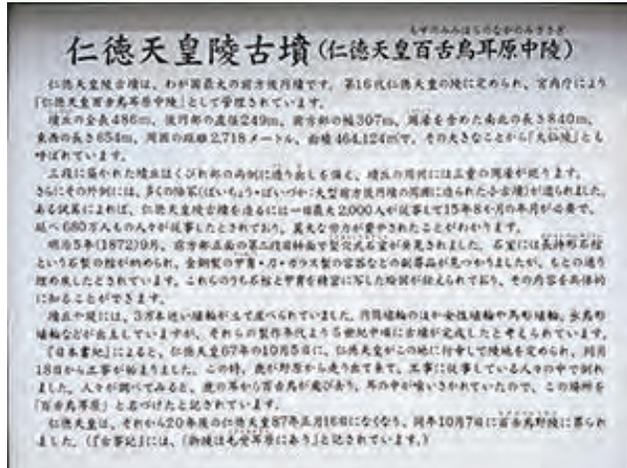


図 28 調査対象とした遺跡の解説看板 8

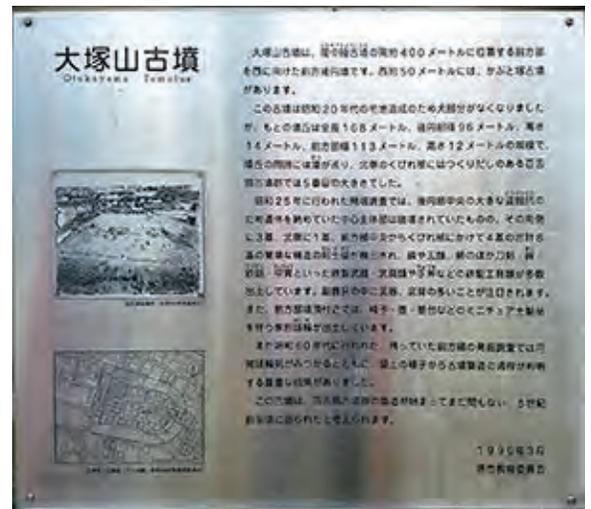
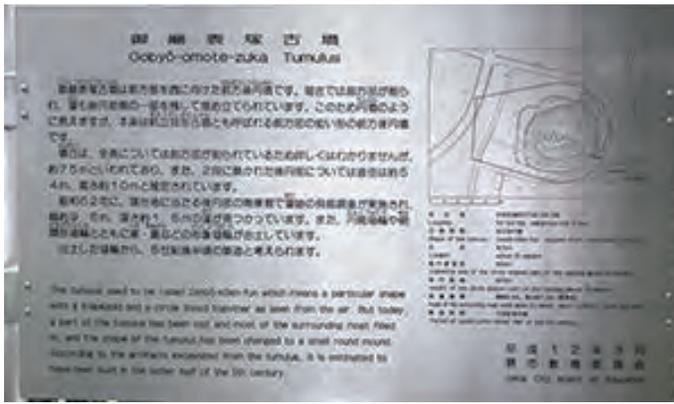


図 29 調査対象とした遺跡の解説看板 9

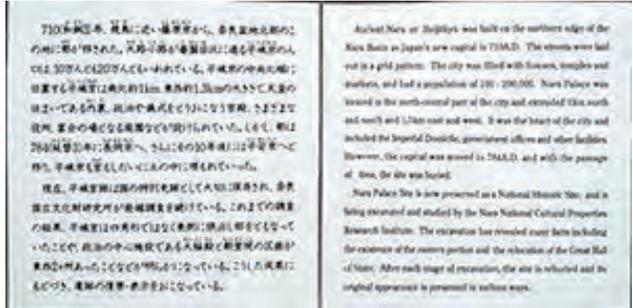
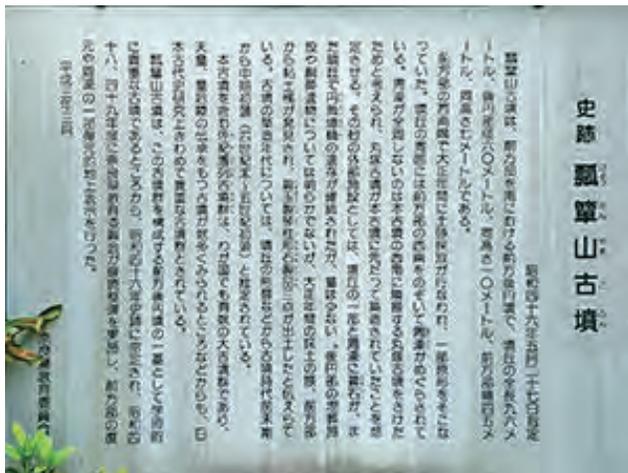


図 30 調査対象とした遺跡の解説看板 10



図31 調査対象とした遺跡の解説看板11



図 32 調査対象とした遺跡の解説看板 12

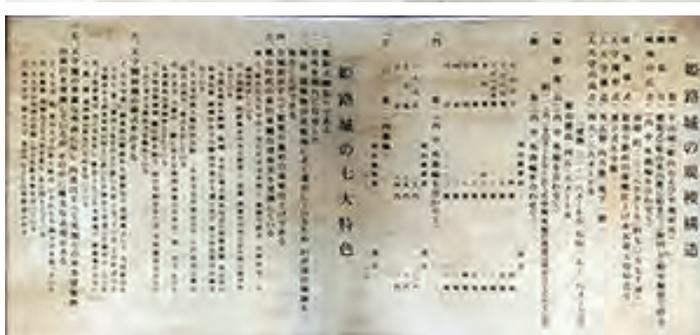
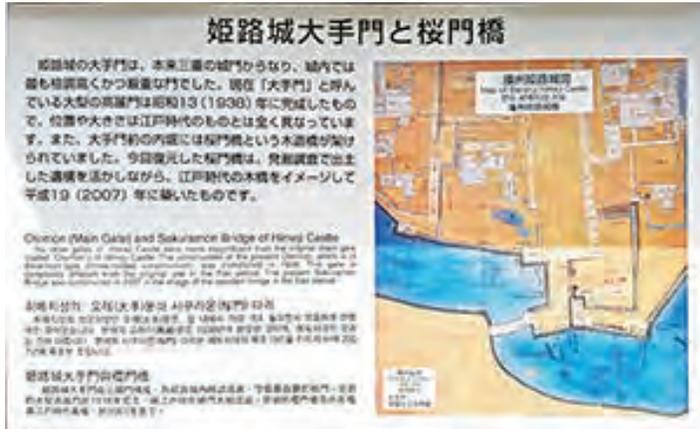


図 33 調査対象とした遺跡の解説看板 13



図 34 調査対象とした遺跡の解説看板 14



図 37 調査対象とした遺跡の解説看板 17



図 38 調査対象とした遺跡の解説看板 18

看板チェックシート ver2

場所： (/ 枚) 担当： 日時： no.

素材	<input type="checkbox"/> プラスチック	<input type="checkbox"/> タイル	<input type="checkbox"/> その他
	<input type="checkbox"/> 石	<input type="checkbox"/> 木	()
看板高 字	看板 : 縦	m × 横	m
	地上から :	m 角度	°
	m先まで見える	大きさ	c m
	字	<input type="checkbox"/> 黒 <input type="checkbox"/> 白 <input type="checkbox"/> その他	()
言語	<input type="checkbox"/> 英語	<input type="checkbox"/> 韓国語	
	<input type="checkbox"/> 中国語	<input type="checkbox"/> その他	()
その他	<input type="checkbox"/> フリガナ	<input type="checkbox"/> 専門用語	看板背景色()
	<input type="checkbox"/> 図 (枚)	<input type="checkbox"/> 写真 (枚)	
向き	<input type="checkbox"/> 内	<input type="checkbox"/> 外	
整備状況	()年設置		
図・形状・状態	<input type="checkbox"/> 看板	<input type="checkbox"/> 板状	
	<input type="checkbox"/> 柱状	<input type="checkbox"/> その他	()

図 39 調査に用いたチェックシート (Ver. 2)

第3章 遺跡解説看板についての各種考察

第1節 素材・サイズなどからみる遺跡解説看板の視認性について

はじめに

本節では、解説看板に印刷された文字のサイズや、看板そのもののサイズ、文字色・背景色のバランス、形・材質といった視認性についてデータの整理し、解説看板の視認性について考察をおこなう。

1. 基礎データの整備

基礎作業として、チェックシートのデータをもとに各項目の一覧表を作成した。

- ・素材 (表2)
- ・看板サイズ (表3～7) …縦の項目が看板の縦の長さ (cm)、横の項目が横の長さ (cm) である。基本的に、小数点以下は四捨五入した。
- ・文字サイズ
- ・背景色と字色 (表8)

以上のような基礎データをもとに各項目のグラフを作成し、解説看板の視認性に関する傾向分析を試みた。

2. 分析の結果

各項目について、分析の結果と傾向をみてみよう。

素材 周囲の景観への配慮が必要な場所では木製・タイル製の看板が、周囲の景観への配慮がほとんど必要でない場所ではプラスチック製の看板が多い傾向にある。例をあげると、石見銀山の町並み地区で木製の看板が多く見られる一方で、住宅地にある百舌鳥・古市古墳群ではプラスチック製の看板が圧倒的である。また、薄暗い銀山の坑道内ではプラスチック製の看板が多いことから、景観に対して一定の配慮が必要な場合でも、周囲の環境によっては見やすさを重視してプラスチック製の看板が用いられることがあると分かる。木製の看板は木の色によっては文字が見にくい、周囲の景観の保護に適している。歴史的景観を構成する木製の建造物付近に設置しても違和感がないからである。また、タイル製の看板は、景観を保護するため地面に近い位置に看板を

表2 各遺跡における解説看板の素材

	百舌鳥	古市	平城	姫路	石見
プラスチック	27	26	6	13	7
木				3	6
金属	14		2	5	
タイル	4		4		3
石			1		1
ラミネート					1

表3 古市古墳群における解説看板のサイズ

古市古墳群		横サイズ (cm)					
		60	75	90	115	120	150
縦 サイズ (cm)	60	3				2	
	70			2			
	75		2				
	80					1	
	90					11	4
	110				1		

表4 平城宮における解説看板のサイズ

平城宮		横サイズ (cm)									
		20	30	45	60	80	83	135	136	150	220
縦 サイズ (cm)	15	1									
	20			1							
	30		1								
	40					1					
	45			1							
	60				1						
	63						1				
	80									1	
	90							1	1	1	
	129										1

表5 百舌鳥古墳群における解説看板のサイズ

百舌鳥古墳群		横サイズ (cm)																	
縦サイズ (cm)	24	30	39	40	42	44	45	60	70	74	80	95	100	118	119	120	180	500	
29					1														
30								2											
39																			
40	1																		
50												1							
60								1			1		1				1		
64										1									
74			1																
80				2					1		1						2		
89																1			
90																	21		
99																		1	
102							1										2		
103								1											
110																		1	

表6 石見銀山における解説看板のサイズ

石見銀山		横サイズ (cm)														
縦サイズ (cm)	36	39	40	51	58	60	80	81	90	94	100	110	134	167	180	
25			1													
29		1														
35						1										
36				1												
40					2											
42						1										
55							1									
60												1				
63											1					
67	1															
68											1					
74														1		
90									1						1	
97													2			
143								1								

表7 姫路城における解説看板のサイズ

姫路城		横サイズ (cm)																	
縦サイズ (cm)	30	33	50	55	60	63	65	70	90	100	106	110	120	125	170	179	180	255	
40			1				1												
42	1																		
47								1											
48		1				1													
74									1				1						
78				1															
90																		1	
104											1								
110																1	1		
120								1											
130					1										1				
150																			
157																		1	
177												1							
194														1					

設置する際に、傷を受けにくい丈夫な素材として採用されたのだと考える。見易さの観点から言うと、木製の看板と金属製の看板は文字が読みづらい傾向にある。なかでも金属製の看板は、表面が光や周囲の風景を反射するなどするため特にみづらい傾向にある。

文字サイズ 0.8～2.0cm角のものが多い。大きい看板ほど文字が大きい傾向にある。基本的に文字サイズは大きいほど見やすいが、看板設置にかかる費用や情報量、周囲の景観などに配慮した妥協も必要である。文部省による誘導案内設備に関するガイドラインを考えると、これはほぼ適切なサイズだといえるだろう。

看板サイズ 非常に多岐にわたる。縦横の比率はさまざまだが、基本的には横幅のほうが大きい。今回調査した遺跡では、それぞれが一定の統一規格のもとで作られた看板を持っていたが、その規格にそぐわない看板も遺跡に多数設置されていた。この原因には、古い看板が撤去せずに残された場合と、環境に応じて設置する看板を分けた場合の二種類が考えられる。

背景色と字色 白の背景に黒字、それ以外でも比較的薄い色の上に濃い字の看板が多い。こうした色調が見やすく、万人に受け入れられやすいからだと考える。他にも木肌や木目調の模様を背景にした看板や、金属を背景とした看板

も一定数存在する。これについては素材の項目で述べたとおりである。金属を素材にするものとは別に、背景を金色に塗った看板もあるが、これも文字が読みづらい傾向にある。背景を金色に塗った看板は姫路城に見られる。城の美しく壮大なイメージを金色で表現しようとしたと考える。

3. まとめ

今回は遺跡看板の視認性について、①素材、②文字サイズ、③看板サイズ、④背景色と文字色の関係という4つの観点から整理した。その結果、視認性についてみる上で考慮すべき点として、下記のことが明らかになった。

遺跡を解説するという看板の役割上、「見やすさ」と「遺跡の景観を損なわない」ことはともに考慮しなければならない課題である。そのため、解説看板においては両者の兼ね合いが重要となってくるが、遺跡ごとにその傾向などにはさまざまなあり方が認められた。両者のバランスは遺跡の性格などさまざまな要因によって影響を受けるため、遺跡ごとの個性が特に出やすいことも判明した。

また、周辺景観に対する配慮も重要な要素である。例えば木造建築が周辺に多いエリアでは、視認性を多少犠牲にしながらも木目調の看板を採用することで、全体の景観に配慮するケースが認められた。また百舌鳥・古市古墳群のなかでも住宅街の中に設置された看板では、街路の狭さなどにも影響され、小さいサイズの看板しか設置できないケースもあった。このように「見やすさ」のみを追求した看板の設置は難しいという現実がうかがえた。（赤木）

参考資料

『公共交通機関の旅客施設に関する移動等円滑化整備ガイドライン（バリアフリー整備ガイドライン）』2007

<http://www.mlit.go.jp/barrierfree/public-transport-bf/guideline/guidelinesisetu.pdf#search=%27E5%85%AC%E5%85%B1%E4%BA%A4%E9%80%9A%E6%A9%9F%E9%96%A2%E6%97%85%E5%AE%A2%E6%96%BD%E8%A8%AD%E3%81%AE%E7%A7%BB%E5%8B%95%E5%86%86%E6%BB%91%E5%8C%96%E6%95%B4%E5%82%99%E3%82%AC%E3%82%A4%27>

第2節 遺跡解説看板における画像コンテンツについて

1. 概要

本節では、遺跡解説看板における図や写真など文章以外の視覚情報を「画像コンテンツ」とし、検討をおこなう。検討対象である図や写真は、遺跡解説看板において頻繁にみとめられるものであるが、具体的にどのような図・写真を看板に掲示しているのかは、看板ごとに大きく異なることが予想される。そこで、基礎データの収集対象である各遺跡のうち、百舌鳥古墳群 36 枚、古市古墳群 27 枚、石見銀山 38 枚、姫路城 42 枚、平城京 8 枚に加えて出雲大社前、今市大念寺古墳の各 1 枚、計 125 枚について、データの分析と傾向のよみとり、その背景の考察を実施した。なお佐紀古墳群の遺跡解説看板については本項目で扱う画像コンテンツを含んでいないため除外している。

解説看板における画像コンテンツについて以下の通り分類し、各種についてグラフ化、傾向をみた。

- ・**広域地図**…看板の設置された近辺だけではなく他の遺跡なども含有する程度に広域を示す地図

表8 各遺跡における解説看板の背景色と字色

	百舌鳥	古市	平城	姫路	石見
白・黒	25	6	6	2	6
白・青	2				1
グラデーション・黒		3			
木（木目風）・黒				1	6
金属・グレー	2				
金属・黒	12			1	
パステル・黒	4	15	2		3
金色・黒				2	
黒・白				2	
銀色・黒				2	
橙・白				1	
茶・黒				1	
青・白			1		
水色・黒		1			
緑・白		1		5	
石・彫り			1		1
青・不明			1		
木（木目風）・白					1
なし・茶				1	
なし				1	

- ・ 周辺地図…広域地図に対して、看板の遺跡近辺のみを示す地図
- ・ 遺構・検出状況写真…古墳群においては遺構や検出状況の写真、姫路城などにおいては建物の一部分の写真
- ・ 遺物等写真…遺物など遺跡に関連する物品の写真
- ・ 全体写真…遺跡全体あるいは遺跡の大部分が写っている写真
- ・ その他図…上記以外の図（挿絵や絵巻物など）

2. 分析

①全体傾向

はじめに全体的な状況について確認しておこう（表9、図40・41）。今回調査を行った125枚の遺跡解説看板には、

表9 コンテンツの合計数（全体）

看板No.	全体						
	コンテンツ項目						
	広域地図	周辺地図	遺構・検出状況写真	遺物等写真	全体写真	その他図	
古市	11	14	11	14	42	2	
百舌鳥	7	25	14	8	67	0	
石見銀山	9	3	3	2	16	20	
姫路	2	14	34	8	1	14	
平城宮	1	4	3	2	0	3	
大念寺古墳他		1	2	1			
出雲大社前	1				6		
全体	31	61	67	35	132	39	

総計364個の画像コンテンツが含まれている。平均すると1枚につき約3個の画像コンテンツが含まれることとなる。但し、364枚中42枚は画像コンテンツを含まない遺跡解説看板であるため、実際に画像コンテンツを含むものについてだけ考えると、1枚につき平均約4個になる。

表10 遺跡解説看板毎のコンテンツ（古市古墳群）

看板No.	古市古墳群						
	コンテンツ項目						
	広域地図	周辺地図	遺構・検出状況写真	遺物等写真	全体写真	その他図	
1		1			1		
2		1			1		
3	1	1	1	2	1		
4		1	2	1	2		
5	1	1			2		
6	1			1	1		
7					2	2	
8	1				1		
9					2		
10					1		
11		1	1	1	2		
12	1	1	1		2		
13	1		1		3		
14	1	1					
15	1				3		
16					2		
17	1				2		
18					2		
19			1	1			
20		1			1		
21		1			3		
22		1	1	3	2		
23	1	1			1		
24	1		1	3	1		
25		1	2	2	2		
26					2		
全体	11	13	11	14	42	2	

最も多い要素は全体写真で、その数は132個、比率でいうと36%である。2番目に多い要素が遺構・検出状況写真で67個（比率：18%）、3番目が周辺地図で60個（比率；17%）となっている。全体写真が多いことの背景として、比較的どのような遺跡であっても掲載しやすく、また1枚の遺跡解説看板内に複数の要素が含まれる場合にも、全体説明の部分で用いられていたためである。

②古市古墳群（表10）

まず古市古墳群の場合を考えると26枚の遺跡解説看板に93個の画像コンテンツが含まれている。平均すると1枚につき約3.6個の画像コンテンツが含まれる。古市古墳群の場合、全ての遺跡解説看板が1個以上の画像コンテンツを含んでいた。またウォーキングマップではない、1つの遺跡に関する遺跡解説看板1枚に4枚以上の遺物写真や遺構・検出状況写真が用いられ

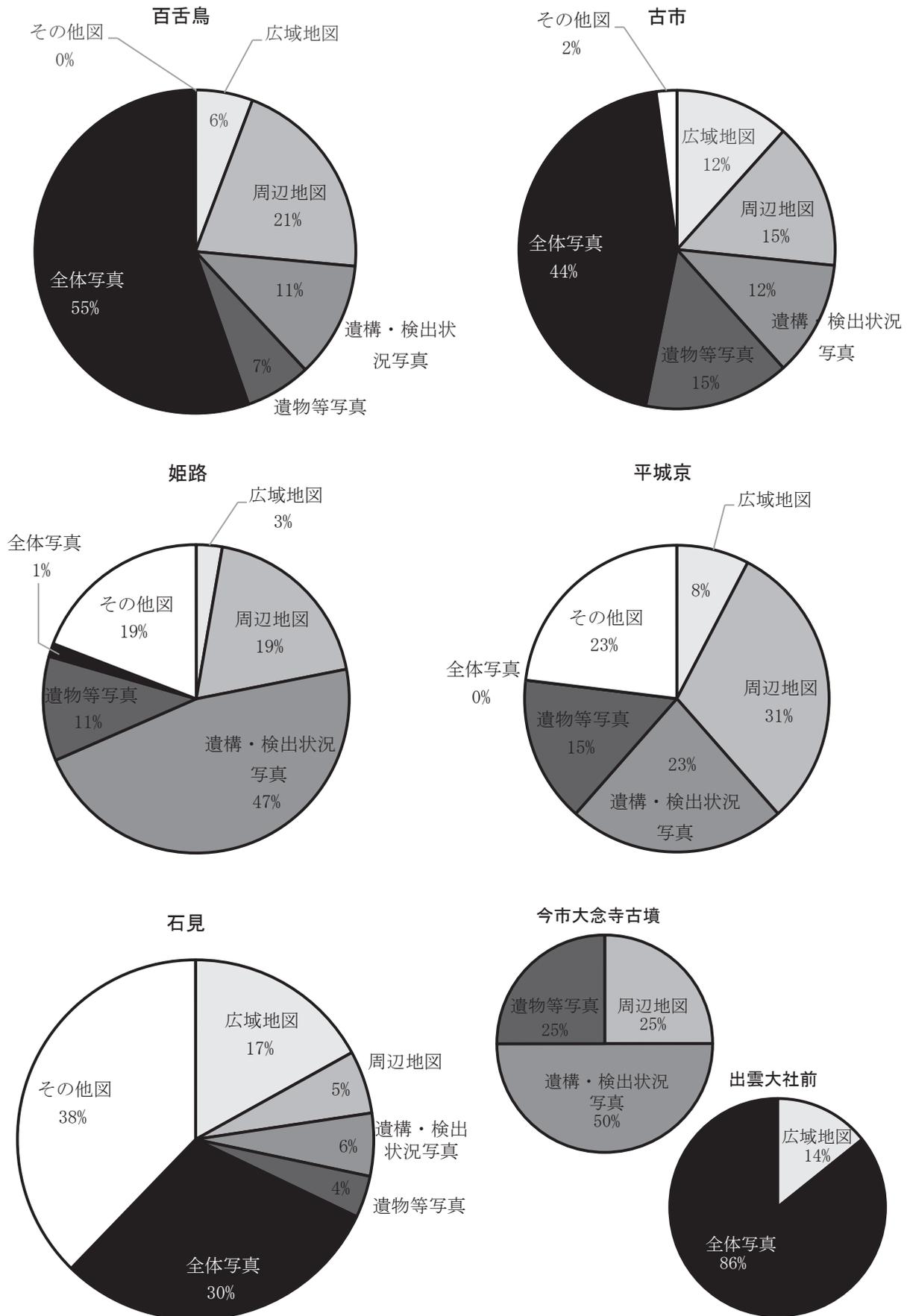


図40 コンテンツの割合 (各遺跡)

表 11 遺跡解説看板毎のコンテンツ（百舌鳥古墳群）

看板No.	百舌鳥古墳群					
	広域地図	周辺地図	遺構・検出状況写真	遺物等写真	全体写真	その他図
1	1				24	
2		2				
3		1				
4		1				
5		1			1	
6	1	1		1	1	
7					30	
8	1	1	2			
9		1				
10		1	1	1		
11		1		1	1	
12		1	2			
13						
14						
15		1			1	
16	1	1				
17		1			1	
18		1	2	1		
19						
20	1	1	2			
21		1				
22		1	2			
23		1			1	
24						
25						
26					1	
27	1	1	1		1	
28				3		
29		1			1	
30						
31		1		1	1	
32						
33		1	1		1	
34						
35		1			1	
36	1	1	1		1	
全体	7	25	14	8	67	0

表 12 遺跡解説看板毎のコンテンツ（佐紀古墳群・平城宮）

看板No.	佐紀古墳群・平城宮					
	広域地図	周辺地図	遺構・検出状況写真	遺物等写真	全体写真	その他図
1						
2		1				
3						1
4						1
5						1
6		2	2	2		
7		1	1			
8	1					
全体	1	4	3	2	0	3

ている場合も、野中古墳や津堂城山古墳など複数で見られた。

最も多い要素は全体写真で42個、44%であり、2番目が遺物等写真で14個、15%となっている。全体写真が多いのは百舌鳥古墳群の理由であると考えられる。

③百舌鳥古墳群 (表11)

続いて百舌鳥古墳群についてみてみよう。百舌鳥古墳群において調査した25枚の遺跡解説看板には、計121個の画像コンテンツが含まれている。平均すると1枚につき約5個の画像コンテンツが含まれることとなる。画像コンテンツを含まない8枚を除くと1枚につき平均7個になる。ウォーキングマップのような複数の古墳の全体写真が用いられた遺跡解説看板が複数あったことが画像コンテンツの平均個数が多くなった要因であると考えられる。

最も多い要素は全体写真で67個、55%であり、2番目が周辺地図で25個、21%、3番目が遺構・検出状況写真で14個、11%となっている。他の場所と比較しても55%と全体写真の割合が大幅に多いが、この理由としては百舌鳥古墳群に宮内庁指定の天皇陵が多く存在しているためだと考えられる。天皇陵の場合には遺構や遺物の写真使用が難しいため、このようになっているのである。

全体写真と周辺地図が各1枚の組み合わせが多く見られた。

④平城京 (表12)

平城京の場合は、8枚の遺跡解説看板に13個の画像コンテンツが含まれている。平均すると1枚につき約2個の画像コンテンツが含まれる。画像コンテンツを含まない遺跡解説看板は1枚であった。

最も多い要素は周辺地図で個、31%であり、2番目が同率で遺構・検出状況写真、その他図で3個、23%となっている。

⑤石見銀山 (表13)

石見銀山の場合は、38枚の遺跡解説看板に53個の画像コンテンツが含まれている。平均すると1枚につき約1個の画像コンテンツが含まれる。画像コンテンツを含まない17枚を除くと1枚につき平均3個になる。画像コンテ

表13 遺跡解説看板毎のコンテンツ (石見銀山)

看板No.	石見銀山					
	広域地図	周辺地図	遺構・検出状況写真	遺物等写真	全体写真	その他図
1						
2		2			1	
3						
4		1				
5						1
6						1
7						1
8						1
9						1
10						1
11			1			
12						
13	1	1		1		1
14						6
15						
16						
17						
18						
19	1					5
20	1					
21	1				4	
22					2	
23					4	
24				2	2	2
25	1					
26					5	
27						
28			1			
29						
30						
31						
32						
33	1					
34						
35						
36						
37						
38						
全体	9	3		3	2	16
全体			3	2	16	20

表 14 遺跡解説看板毎のコンテンツ（姫路城）

姫路城		コンテンツ項目				
看板No.	広域地図	周辺地図	遺構・検出状況写真	遺物等写真	全体写真	その他図
1		1				
2		2				
3	1					
4		1				
5				3		
6				1		
7		1				
8						
9						
10		1				
11						
12						1
13						
14						
15						
16						
17						
18						
19						
20				2		2
21				1	2	
22				3		3
23				1		1
24				1	1	
25						
26		1		4		1
27		1		2	1	1
28		1		4		1
29		1		4		1
30		1		3		1
31		1		2		1
32		1		2		1
33		1				
34						
35						
36	1					
37				1		
38				2		
39						
40				3		
41						
42						
全体	2	14	34	8	1	14

ツを含まない文字のみの遺跡解説看板が非常に多く見られた。

最も多い要素はその他図で20個、38%であり、2番目が全体写真で16個、30%、3番目が広域地図で9個、17%となっている。その他図の中身としては挿絵が非常に多い。

⑥姫路城（表14）

姫路城の場合は、42枚の遺跡解説看板に73個の画像コンテンツが含まれている。平均すると1枚につき約2個の画像コンテンツが含まれる。画像コンテンツを含まない16枚を除くと1枚につき平均3個になる。石見銀山同様画像コンテンツを含まない文字のみの看板が非常に多い。

最も多い要素は遺構・検出状況写真で34個、47%であり、2番目が同率で周辺地図、その他図で14個、19%となっている。遺構・検出状況写真について、場内の防御施設などについての写真が多数掲載されていたため最も多くなった。

⑦出雲大社前

⑧今市大念寺古墳

最後に、出雲大社前と今市大念寺古墳の遺跡解説看板については各1枚ずつであるため省略する。（グラフ参照）

3. まとめ

多くの場所では全体写真が用いられていた一方、姫路城・平城京ではほとんど用いられていなかった。また百舌鳥・古市古墳群では含有する画像コンテンツも似た傾向を示す一方で、古市古墳群のものはより多く、更に複数の性格を持つ画像コンテンツが併用されている場合も多かった。上記のような、複数の種類の画像コンテンツを遺跡解説看板に用いることで、観覧者がその遺跡に対してより関心を示しやすくなり、深く理解できるようになるのではないだろうか。（岩朝）

第3節 遺跡解説看板におけるデジタルコンテンツの利用について

1. デジタルコンテンツ要素の意義と定義

まず、本項の題名にも使っている「デジタルコンテンツ」とは何を意味するのかの定義づけを行いたい。「デジタルコンテンツ」とは、以下の4つの要素のどれかを持つものを指すこととし、それを導入している看板を分析することで、看板という既存の枠に加えられる新しい姿を考察したい（図42）。

- ①『Quick Response Cord』（以下QRコード）によるwebページへのリンク
- ②『Augmented Reality』（以下AR）による手軽なデータへのアクセス
- ③『Virtual Reality』（以下VR）による精巧な再現データへのアクセス
- ④『音声ガイド』による文字以外の情報面での拡充

2. 導入されている場所

私たちが調査した中で、QRコードが使用されていたのが、藤井寺市と羽曳野市にわたる「古市古墳群」で、AR

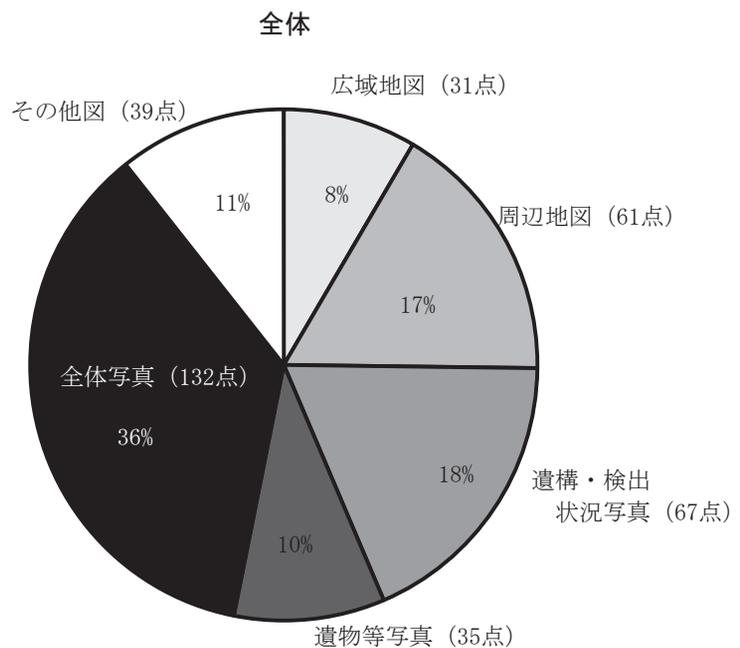


図41 コンテンツの割合（全体）

遺跡所在地	デジタルコンテンツ	母数	百分率	備考
藤井寺	13	13	100	
羽曳野	7	14	50	
百舌鳥	0	39	0	VRあり
岩見出雲	4	33	12.12	音声ガイド VRあり
姫路城	1 16	19	5.263	AR看板自体は複数 (16枚)存在
平城京 佐紀	0	12	0	
合計	25	130	19.23	

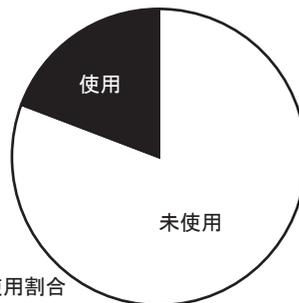
が使用されていたのが「姫路城内」、VRが使用されていたのが、看板ではなく博物館などの施設内だが「百舌鳥古墳群」と「石見銀山」、音声ガイドが使用されていたのが「石見銀山」である。なお、VRは看板外の体験活動のため、後述することとする。

3. 導入されている割合と特徴

調査した看板の中で、百舌鳥古墳群のもの、佐紀古墳群・平城京のものにはデジタルコンテンツ要素が一切なかったため、総合計に大きな影響を与えている。

個別に見ていくと、藤井寺市と羽曳野市の古市古墳群の解説看板に使用されて

QR	15.38
AR	12.31
音声	3.077



デジタルコンテンツの使用割合

図 42 各遺跡看板のデジタルコンテンツ使用率

いるデジタルコンテンツ要素はかなり多いことがわかる。これらの看板には、大体の看板にQRコードが設置されており、手持ちのデバイスで読み取ること古墳の情報を見ることができるwebページにジャンプできる。他のQRコードでは、ドローンが撮影した上空からの映像を通して、普段は見られない位置の映像を見ることができる。

姫路城のAR看板は、調査した枚数こそ1枚だったが、同種の看板が合計16枚存在しているため、そのことを鑑みると、全体の看板の枚数の20%程度は設置されているといえるだろう。AR看板の内容は、解説をアニメーション映像や実写映像で見せるものから、公式マスコットキャラクターの「しろまるひめ」と記念撮影をするものまでである。特に三の丸の看板と姥が石のあたりでARを利用している様子を見かけた。

石見銀山の音声ガイドは、2009年に始まった小型端末をレンタルすることで聞くことのできるものである。しかし、看板に番号が張り付けてあるものと、その番号が取れて糊が残って何とかそれらしいと分かるものと、全く分からないものに分かれていた。看板に印刷するのではなく、後付けにした場合の維持管理の難しさが伝わると感じる。

4. 看板外でのデジタルコンテンツ要素

VRが看板に用いられることはなく、近くの大きな博物館で「HMD」を使用した体験コースのようなものを申請することで体験できる。私たちが体験したVRは以下の二つである。

①百舌鳥古墳群、大仙古墳の復元を行う「仁徳天皇陵古墳VRツアー」

②石見銀山の間歩の中を歩く体験をする「VR銀山～石見銀山大久保間歩～」

一つ目のVR体験は、大仙古墳を中心とした百舌鳥古墳群を高くから見た映像と、3DCGで復元したものをHMD越しに覗くものだった。

二つ目のVR体験は、石見銀山の中で、入ることのできない「大久保間歩」の映像を撮影し、3Dドームに張り付け、疑似的に360度の映像に編集したものだった。

5. 調査の所見

各地の看板を調査した結果、「デジタルコンテンツ」の設置時期と集客の関係がありそうだと考えられる。藤井寺・

羽曳野の「古市古墳群」解説看板は2018年に、世界遺産化を目指すために設置され、75%という高い設置率が確認できた。その内容も、古墳を見学するのに手軽かつ十分な映像を見ることができているものである。一方、各地の看板で見学するのではなく、「大山古墳」という名物を打ち出し、博物館を設置している堺市の「百舌鳥古墳群」は、VR環境での観覧を博物館で行い、周辺の公園への誘導を行っている。どちらも、設置時期は新しいが、二つの間にある異なる特徴をうまく利用しているといえるだろう。

平城京・佐紀古墳群は、看板の設置や整備がすでに行われており、新たに設置することは難しいと考えることは想像に難くない。看板自体の修正が難しく、遺跡公園として整備されている状況を考えれば、そちらでの理解を求めているのだろう。百舌鳥古墳群にも博物館があるが、ここでは堺市の歴史がベースとなって展示されており、それと違って平城京の博物館は、遺跡からの出土品や場所の解説が行われており、十分に知識を補うことができる。

姫路城がARアプリを導入したのは2015年で、城の改修が行われた2017年に、アプリの機能も大幅に拡充されていた。看板を撮影した後、移動しながら、または別の場所で落ち着いて見ることができるため、忙しく観覧するだけでない新たな要素が増える面もある。すべての場所・モノの解説をするわけではないが、見どころと思われる重要なポイントには設置してあったため、不足感を覚えることはなく、また、多くの人を通るルート上に集中して設置されていたため、「よく見かける」という印象を持たせることができていたのではないかと推測される。

石見銀山の音声ガイドは、2009年に導入されたサービスである。2007年の世界遺産登録後に設置されたことから、観覧客の増加によるもの、もしくは解説の充実を図ったものだと推測できる。特に大きな案内もなく、設置されてから時間がたち、音声ガイドの知名度も下がっており、ガイドの番号が確認できない看板も多いため、現在は使用者が少ないと考えられる。

(神崎)

第4節 遺跡解説看板の立地条件について

はじめに

立地条件は遺跡解説看板の発見が容易であるか否か、すなわち遺跡について情報が得られるか否かに関わるものである。したがって本稿では、今回実地調査を実施した百舌鳥古市古墳群・佐紀盾列古墳群および平城宮周辺遺跡・姫路城・石見銀山関連遺跡の遺跡解説看板についてそれぞれの立地条件の傾向を分析する。また、併せて各遺跡の看板における立地上の面白い試みなども紹介したい。

1. 遺跡解説看板と遺跡・遺構・道路・見学路の立地関係

①**百舌鳥・古市古墳群** 本研究で調査を実施した遺跡解説看板は全て墳丘外に設置されていた。中でも特に道路または見学路上に設置された看板の割合が高い。駐車場や広場・公園等を擁する古墳を除き、百舌鳥古墳群では36枚中27枚、古市古墳群では27枚中18枚の看板が道路・見学路上またはそれらの道に面して設置されている。

なお、両古墳群中において2017年・2018年に新たに設置されたほぼすべての解説看板に付図として測量図または赤色立体地図などが掲載されている。こうした地図内に看板の位置（現在地）を示す点が打たれていた。当該の地図及び撮影した写真データから判断するに、看板の設置位置が「墳丘北側」「前方部側」などと特定の位置に決まっているわけではないことがわかる。

②**佐紀盾列古墳群および平城宮周辺遺跡** 本研究で調査を実施できた佐紀盾列古墳群および平城宮周辺遺跡の遺跡解説看板はすべて遺跡・遺構のすぐそばまたは内部にあたる位置に設置されており、特に9枚中7枚の看板が道路または見学路に面して設置されていた。

③**姫路城** 姫路城および周辺で調査を行った遺跡解説看板は全て道路・見学路・城内廊下等の発見しやすい場所に設置されていた。姫路城については本研究で調査を実施した他の遺跡とは異なり、城下町自体も遺跡であるほか、天守・廊下・登城路（＝見学路）といった遺構の内部・道沿いの部屋・設備等はほぼすべて現存している。姫路城内の解説看板はそれらを対象とするため、全体を概説する一部の看板を除き、すべて対象となるモノのすぐそばに立地する。

④**石見銀山遺跡** 石見銀山遺跡およびその周辺において調査を行った遺跡解説看板は、全体を解説するものを除く

ほぼすべての看板が遺構の目の前または内部に設置されていた。間歩（まぶ）内の見学路を含む道路・通路に面して設置された看板は39枚中29枚である。

小 結 多少の距離の差異はあるものの、全体を概説する解説看板を除くほぼすべての遺跡解説看板はその対象となる遺跡・遺構・施設等のすぐそばまたは内部に設置されていると言える。また、本研究で調査を行ったすべての遺跡・地域において一般道路・見学路に面する立地の解説看板の割合が非常に高かった。

2. 考察

対象とする遺跡・遺構に対して遺跡解説看板がどのような立地をとるかについては以下の三例に区分可能と考えられる。()内には、調査を行った遺跡の中から当該の考察に最も当てはまる遺跡を選んで記載している。

①**土地利用上の制約（百舌鳥・古市古墳群）** 古墳群等、全体が一つの遺跡でありながらその内部の各個の遺跡・遺構の状況が異なる際には周辺の土地利用上の制約を受けやすい。特に百舌鳥・古市古墳群は周辺が住宅地であり、建造物が古墳の眼前に迫っているだけでなく開発により墳丘や周溝が失われた古墳も少なくない。また、宮内庁の管理下にあるか、または水濠を持つなどして立ち入りに難のある古墳も多い。こうした場合、看板を設置するスペースはほとんどないため、道路端などの遺跡の外にあたる場所が消極的に選択されるのではないかと考えられる。一方、幹線道路やその近辺への看板設置は結果的に見学者のみならず通行人にも遺跡の周知を行うことができる。

②**見学者・通行人に対するアピール（平城宮・石見銀山）** 土地利用上の制約がない場合、解説看板の立地として遺跡・遺構範囲内の道路に面する位置や見学ルート上などが積極的に選択されるとみられる。これは、遺跡が面的な広がりをもって整備されていることから比較的自由に看板の立地を決定できるためである。こうした看板の立地は、見学者または通行人に対して看板および対象となる遺跡・遺構の認知を高める意図があると考えられる。

③**遺跡構造上の制約（姫路城）** 遺構・施設などが細部に至るまで現存しており、その見学ルートがほぼ一定に決まっている遺跡の場合、遺跡解説看板は見学ルート上の遺構・施設ごとに細かく設置される。解説看板を必要とする要素・場所が非常に多いため、他の看板と重ならないようこうした遺跡の解説看板の立地は必然的に決定されると思われる。

3. 百舌鳥古墳群解説看板における『写真撮影ポイント』について

百舌鳥古墳群の一部の遺跡解説看板における測量図・地図・模式図等には、看板の所在地を示す赤点とともに『写真撮影ポイント』を示す星形の点が設けられていた。写真撮影ポイントは主に水濠を持つ前方後円墳の前方部端の角部に対して設定され、前方部からくびれ部・後円部にかけての墳丘形状がよく視認できる。こうした試みは、前方後円墳の特異な形状を見学者に示す上で有効であるとともに、写真撮影を促す効果もあると考えられる。美しく撮影された写真はウェブ上に拡散されるなど、さらなる集客も期待できる。この点に関していわゆる昨今の「古墳ブーム」の影響が考えられる。

4. 総 括

看板の意図が「特定の遺跡・遺構を解説する」というものである以上、その解説の対象と看板の距離は可能な限り近いものにされたことが考えられる。その看板が発見されるか否かで見学者が得られる情報量が異なってしまうからだ。しかし、その立地選択の条件においては周辺の土地利用や遺跡の状況に応じて様々な事情が違ってくることがわかった。上記で掲げた②③のように、遺跡が面的に整備されていれば解説看板設置も容易であることが考えられる。一方、①で挙げた百舌鳥古墳群では『写真撮影スポット』をうまく設置するという新たな試みを実施していた。この例は、解説看板及び遺跡周辺の土地利用上の制約を受けつつも、様々な工夫によって見学者および通行人に遺跡の認知・理解を促すことができる可能性を示しているように思われる。

(我妻)

第4章 総括

第1節 研究成果の総括

ここまでの基礎研究および考察を通じて、解説看板における様々な個性、特徴などをみてきた。本研究では、それらの考察を通じて将来的な課題や展望を提示することが目標として設定してある。そこで本章では、フィールドワークを実施した各遺跡のうち、大阪府羽曳野市・藤井寺市の野中古墳を主軸として、実践的ケーススタディを試みたい。

1. 古市古墳群設置の解説看板の評価点と問題点

まず、大阪府羽曳野市・同藤井寺市にまたがる古市古墳群の遺跡解説看板について、その評価すべき点と問題があると感じられた点について改めて検討及び整理を行った。その結果、以下の10点が列挙された。なお、古市古墳群の解説看板に関する概況は第2章も参照されたい。

・評価すべき点

- ①看板の統一感・適度な差異
- ②多色刷りで見やすいものが多い
- ③コンテンツ（写真・図）が多いと文章を読まずとも楽しみやすい（特に古市藤井寺は多い）
- ④（藤井寺市の遺跡解説看板について）全てにQRコードが付与→看板以上の情報得やすい
- ⑤（同上）先に古墳の形や出土遺物などの基本データが短くまとめられており分かりやすい

・問題があると感じられた点

- ⑥子供には分かりづらい（専門用語・文章量等）
- ⑦看板を見つけにくい（ルート上になく、発見が難しかった/できなかった場合も）
- ⑧看板の位置に危険性（歩道のない道路際など危険 古市羽曳野：安閑天皇陵など、図43）
- ⑨コンテンツ（写真・図）の並び方が雑然としている（古市藤井寺：津堂城山など、図44）
- ⑩古墳群全体を概説する解説看板は少ない

（赤木・岩朝）

2. 求められる課題解決の方法

（1）解説看板の位置を示したマップの作成

先に挙げた指摘のうち、⑦⑧の問題点を解決する試案として「解説看板の位置を示したマップの制作」が有効であると考えられた。本研究の実地調査では、墳丘等の遺構に対する解説看板の位置をチェックシートに書き残しており、作成にあたってその情報を用いる。見学者による解説看板の発見を容易にし、古墳や古墳群に対する理解をより深めることができるような状況をマップ制作の目的とする。

古墳群にかかる周遊マップ等については、主なものとして下記がある。

I. 百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進本部会議制作の古市古墳群マップ

(http://www.mozu-furuichi.jp/jp/visit/furuichi_map.pdf)



図 43 安閑天皇陵古墳 遺跡解説看板の立地



図 44 津堂城山古墳 遺跡解説看板

II. 藤井寺市制作の古市古墳群マップ

(<https://www.city.fujiidera.lg.jp/material/files/group/24/ura.pdf>)

III. もずふるレンタサイクル制作の古市古墳群マップ

(<https://www.sakai-tcb.or.jp/assets/pdf/mozufuru/mozufuru-t04.pdf>)

IV. Google マップ (マイマップ)

(<https://maps.google.com/maps/ms?msid=217595616163179765299.0004d94c6a1b8aec12796&mmsa=0&hl=ja&ie=UTF8&t=m&ll=34.55628,135.597708&spn=0.001162,0.005313&source=embed>)

今回は、「解説看板」という新しい情報を主軸に据えたマップの作製を目指すため、まず Google マップによる地点の登録をおこない、I のマップに改めて図示した。

(2) 子供に分かりやすい解説シートの作成

今回調査した結果として、先述の⑥⑨⑩で挙げられたように、全般的に子供に対して分かりにくいように思われた。特に古墳群に関しては、専門用語が詳しい説明のないまま使用されているほか、その古墳群全体を説明する概説的な看板が少なかった。そのため今回はこれらの看板の補助的な役割を担うであろう「古墳用語解説シート」の作成を考えた。

解説シートについて、対象は子供とし、古墳に対する興味を持ってもらい、より理解を深めてもらうことを目的にする。内容としては古墳群全体の概説的な内容に加えて、難しい専門用語を図などのコンテンツの使用を交えながら説明するものを考えている。

(3) クイズの制作

先述の⑥で挙げたように、調査してきた遺跡解説看板は特に子供に対してアピールが弱いように思われた。これを打開する案として「クイズの制作」を提案したい。

方法としては看板の位置を示したマップにクイズを併記し、現地に赴き看板及び上記の解説シートを確認するとその答えが分かるようにする。この手法を取ることで実際に現地に古墳を見に行く契機となりうる。またクイズであれば子供だけでなくその親や家族など幅広い年代に対して受け入れられやすいと考えている。

(4) 古市古墳群ビュースポットの検討

先述の指摘のほか、今回は計画の関係上実施には至らなかったものの、面白い試みとして「ビュースポットの設定」が挙げられた。

百舌鳥古墳群では周濠を持つ大型前方後円墳を中心に墳丘の形状が良く確認できる「写真撮影スポット」を設け、解説看板上の地図に表記している。一方、古市古墳群についても一部のウォーキングマップに古墳を含む美しい景観を写真で紹介するような取り組みを実施しているが、看板への表記が欠如しているなど普及浸透の上で支障がある。

したがって、将来的には、古市古墳群の一部古墳（特に野中古墳など一般に認知の低い小古墳を考えている）を対

象に「古墳のある風景」や「墳丘上から見える景観」や「墳丘の形状ら立地が良く確認できる場所」などを『古市古墳群ビュースポット』『古市古墳群インスタ映えスポット』として設定し、近年の古墳ブームや若年層の SNS 使用者に向けた発信を行うことが、遺跡の魅力を発信するうえで重要なツールとなりうると考えた。古墳への理解や解説看板へのアクセスの増加、世界“文化”遺産登録に向けた「カルチャーとしての古墳」の浸透がその目的であるといえよう。以下次節において、上記のうち（1）～（3）についての実践を試みる。（神崎・我妻）

第2節 ケーススタディの実践—古市古墳群を例に—

今回の自主研究のまとめとして、大阪大学が1964年に発掘調査を実施した野中古墳の所在する古市古墳群の解説看板についてその良い点、改善できる点などを提示し、そこから同古墳群の情報発信に関わる今後の展望及び研究の成果を生かした具体的な看板活用策を提唱・実施したい。これらの研究活動は、世界遺産登録が期待される古市古墳群に対する認知と理解を高めるうえでも有効であると考えられる。

先に挙げた、評価・改善点10点をもとに、共同研究者およびアドバイザー教員との検討を重ねた結果、古市古墳群解説看板の具体的な活用策として今回は以下の3つを実施することとなった。

- （1）子供に分かりやすい解説シートの作成
- （2）解説看板の位置を示したマップの作成
- （3）古市古墳群クイズの制作

本項では、以上の具体的な活用策を実施した成果（マップ・解説シート・クイズ）を提示し、その企画・方針・展望について詳細を述べる。（我妻）

1. 子供に分かりやすい解説シートの作成

（1）作業目的

調査の結果をもとに看板の補足や簡易的な役割を果たす解説シートを作成した。今回は子ども、特に小学生低学年・中学年程度の年齢層にターゲットをしぼった。また解説シートの解説対象について、1種類目は大阪大学が調査を行った野中古墳を中心に据え（以下解説シートⅠと表記、図46）、2種類目は古市古墳について比較的概説的に説明する（以下解説シートⅡと表記、図47）。

子どもを対象にするにあたって以下の点に留意した。

- ①専門用語などを簡単な言葉で説明する
- ②通常の看板などに比べて色を多く用いてカラフルにする
- ③字を大きくし極力字数を減らす
- ④キャラクターを用いる

①専門用語などを簡単な言葉で説明する

①に関して、野中古墳の看板の場合「鉄鍬（てつぞく）」などの言葉が子どもにはわかりづらいと考え、文章でわか



好きな勉強の科目	日本史
趣味	古市の散策
特技	しっぽを曲げているんな形をつくれる
好きな食べ物	河内産のぶどう
住まい	野中古墳
恋人	いない歴1500年以上
よくお出かけする所	古市古墳群
たんじょう日	3月14日（野中古墳調査開始日）
身長・体重	リンゴ1つ分（甲冑除く）
年齢	1500歳以上
性格	明るく真面目
マイブーム	甲冑の手入れ
悩み事	甲冑が脱げないこと
目標	百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録
座右の銘	政の要は軍事なり
うれしいこと	古墳に人が来てくれること
やりたいこと	野中古墳をもっと有名にする
のなかつちゅから一言	みんな古墳にきてね！

図45 「のなかつちゅ」プロフィール

りやすく説明するように心掛けた。またそもそもの問題として看板が解説している古墳という言葉自体についても解説シートⅡではじめに説明した。

②通常の看板などに比べて色を多く用いてカラフルにする

②に関して通常の看板であっても、背景色として、百舌鳥・古市古墳群の場合は青・白・緑のグラデーションが用いられているほか、写真などのコンテンツについてはカラーで印刷されている。解説シートⅠ・Ⅱともに古市古墳群の看板に合わせる形で背景を類似するグラデーションにした。また解説シートⅠについてはタイトルの周りに色を付け、ふきだしの枠にも色を付けるなど目立たせる工夫をした。ただし目に優しくない原色については使用を控えた。

③字を大きくし極力字数を減らす

③に関して、看板の字の大きさは外国語対応などとの兼ね合いもあり小さくなっていることから、解説シートについては極力子ども向け以外の要素を省き、大きな字にするように心掛けた。特に解説シートⅠはタイトル・説明文・古墳見学時の注意事項についてそれぞれフォントを変更することでメリハリをつけ、飽きさせないようにした。一方で解説シートⅡは SNS の会話場面をイメージした形式を用いることで、子どもに古墳について身近に感じてもらえるように工夫した。

④キャラクターを用いる

④に関して、今回の解説シート作成にあたり野中古墳のキャラクター「のなかつちゅ」を考案した。キャラクターの作成に際しても②に留意し目を引きやすい黄色を主要色として採用した（図 45）。（赤木）

2. 解説看板の位置を示したマップの作成

（1）実施の動機

古市古墳群解説看板について先に述べた 10 点の指摘のうち、⑦⑧では主に『解説看板の位置』について、「発見が難しい」「立地的に危険な箇所がある」といった問題を取り上げている。この問題の解決には、古市古墳群の見学者があらかじめ解説看板の具体的な位置を把握できるような状況の創出が不可欠であり、そのためには『古市古墳群の解説看板の位置を示したマップの作成』が最も有効であると考えた。

（2）マップ作成の手順

マップ作成の第一段階に当たっては、使用者が地図上の任意の位置をポイントで示すことができるサービスとして“Google マイマップ”を使用した。この作業では、現地調査で集めた情報や写真を基に、①羽曳野市作成の看板については黄色、②藤井寺市の看板についてはオレンジ色、③上記看板のうち後述の「古市古墳クイズ」対象の看板については青色、④野中古墳解説看板については紫色、でポイントを打ち、調査の対象であったすべての解説看板をマップ上に示した。

第二段階では、作成した Google マイマップを基に大阪府作成の『百舌鳥・古市古墳群ウォーキングマップ』にポイントを打ちなおし、より分かりやすく見やすい地図の作成を試みた（=『自主研究マップ』とする）。自主研究マップ上では、①クイズ対象看板、②野中古墳解説看板、③それ以外の看板、で色分けを行っている。

（3）古市古墳群解説看板周遊ルートの作成

大阪府作成の『百舌鳥・古市古墳群ウォーキングマップ』においては解説看板の位置が示されておらず、そのウォーキングルートについても解説看板の閲覧はあまり考慮されていないものと思われる。これらも解説看板の発見を難しくしているのではないかと考えたため、したがって本研究では、『自主研究マップ』をもとに「古墳及び解説看板を効率的に周遊するルート」を作成した。ルートの作成にあたっては、①なるべく多くの古墳および解説看板を周遊する、②危険な道路はなるべく避ける、③スタート地点とゴール地点の利便性を考慮する、といった 3 つの点を意識した。その結果、近鉄古市駅をスタート地点・近鉄土師ノ里駅をゴール地点とする周遊ルートが 2 案完成した。周遊ルートは『自主研究マップ』上に点線で示している（図 48）。

（4）結び

古市古墳群解説看板マップ（自主研究マップ）および周遊ルートの作成では、これまで不明瞭だった解説看板の位置を明確に示すことができた。第 3 章で指摘した通り古市古墳群周辺は住宅街となっており、その現地探索においては道に迷うことや古墳及び解説看板を見つけられないということも大いにありうる。本研究で作成したマップ等を公開し実際に活用していただくことで、そういったトラブルの解決が図られることを望む。（岩朝）

試作案

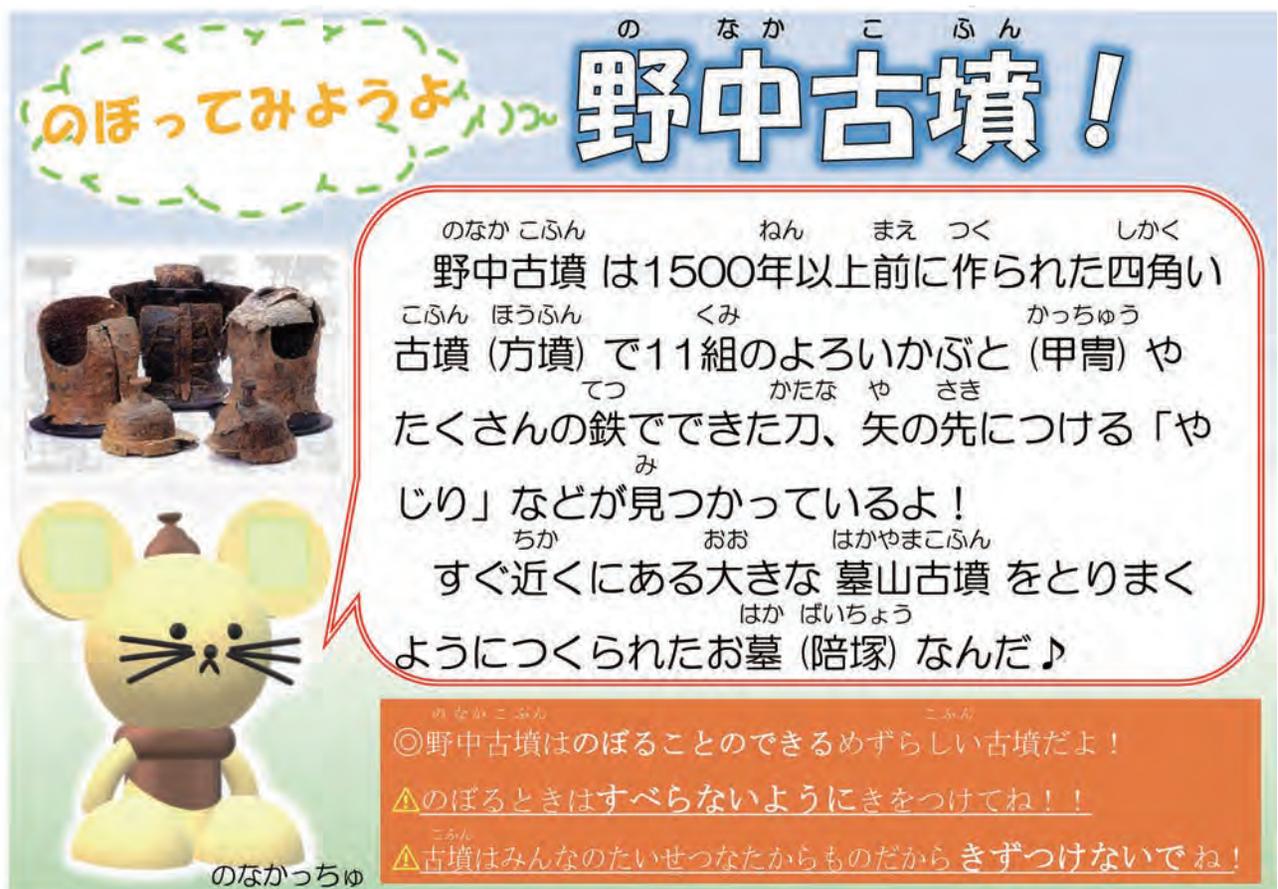
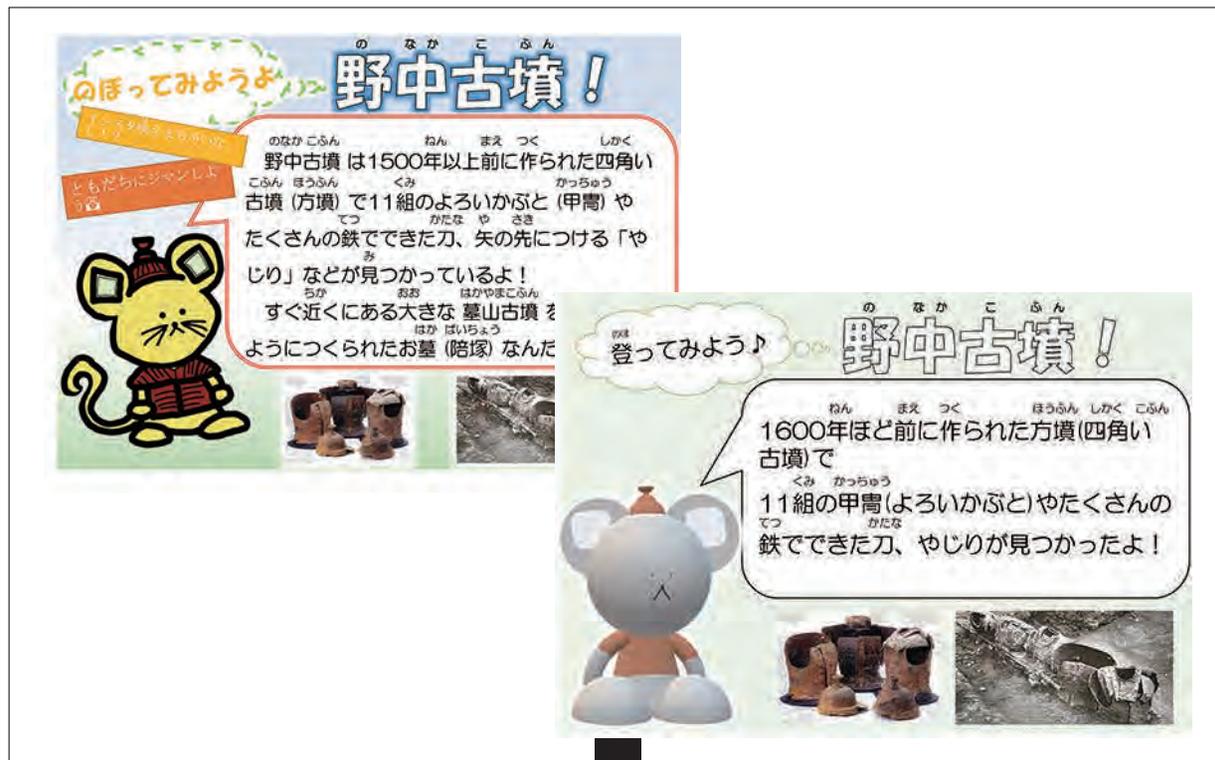


図 46 作成した解説シート例 (『解説シート I』)

おしえて！のなかっちゅ！

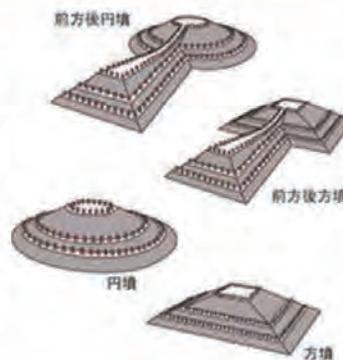
ふるいちこふんぐん しつもん
～古市古墳群についての質問にこたえるよ～

こふん
古墳ってなあに？



こふん
古墳っていうのはむかしのひとのおはかのことだよ。

いまからだいたい1700年ねんから
1300年ねんほどまえには、ちから力をも
っていたひとたちが土をつちもりあげ
て大きなおはかをつくることあがあ
った。それが古墳こふんなんだ。みぎのよ
うにいろんなおお大きなかたちがある
んだよ。



ふるいちこふんぐん
古市古墳群って？



おおさかふ ふじいでらし
大阪府の藤井寺市と
はびきのし こふん
羽曳野市にある、古墳の
あつまりだよ。100よ
りたくさんの古墳こふんがある
んだって！これはふるいち
古墳群こふんぐんのしやしん。みど
りのぶぶんのほとんどが
こふん
古墳だよ。



も す こふんぐん
おとなりの百舌鳥古墳群もすこふんぐんといっしょに、せかいいさんどうろく世界遺産登録をめざして
がんばっているところなんだ。

図 47 作成した解説シート例 (『解説シート II』)

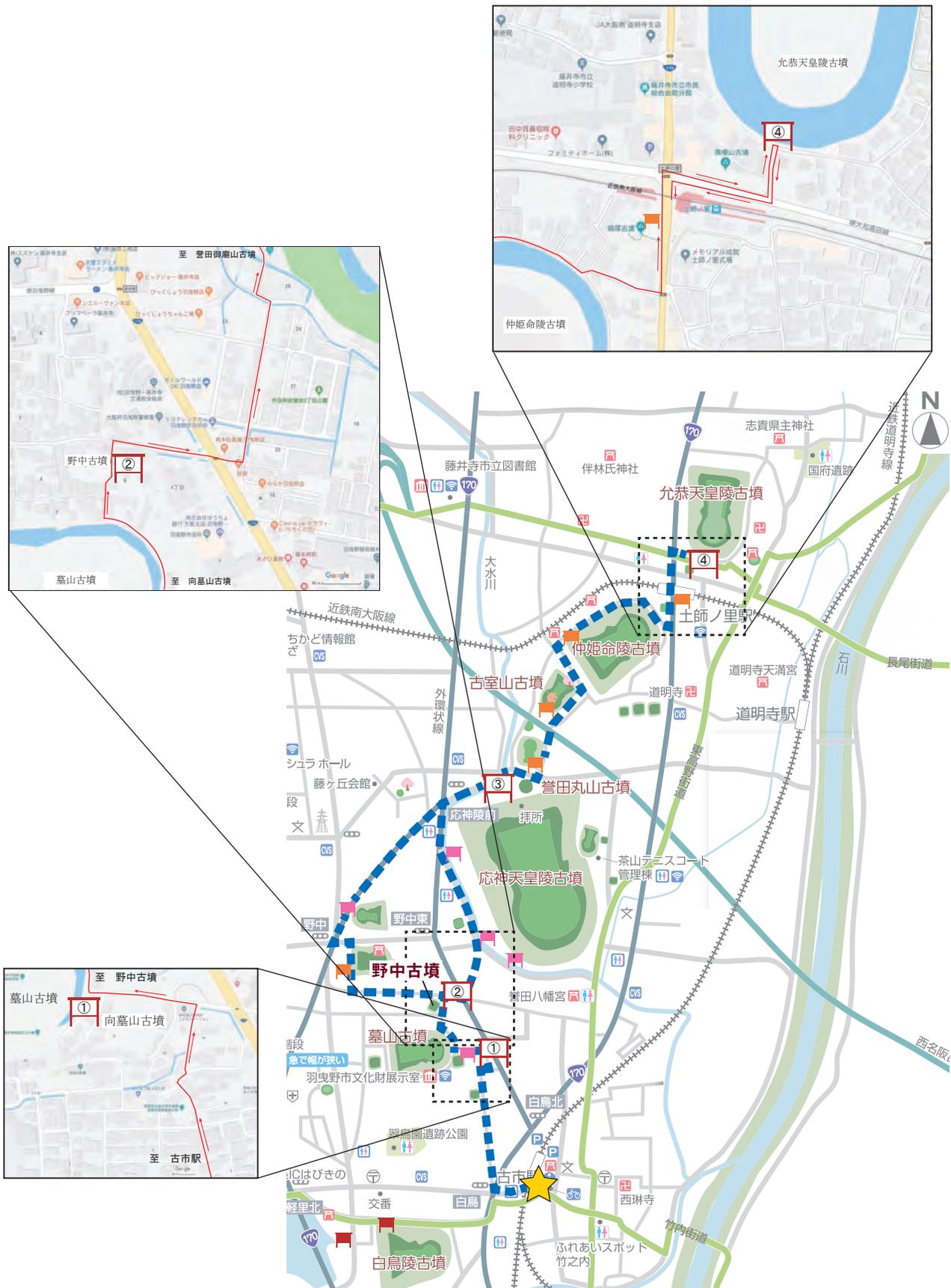


図 48 作成したシート例（古市古墳群見学ルートマップ）

表 15 クイズの例題とそのねらい

クイズ	<p>〈例題 1〉 古市古墳群のまんなかにある「墓山古墳」の大きさは何メートルで、古市古墳群の中では何番目でしょう？ (羽曳野市)</p>
答え	約225m/5番目
ねらい	巨大古墳の具体的な大きさ(何mあるのか)や、目の前で墓山古墳の大きさを見ながら、古市古墳群にはそれ以上に大きい古墳があるということを知ってもらいたい。さらに非常に大きい古墳であるにもかかわらず、陪塚として宮内庁に管理されているという実態を知ってほしい。
クイズ	<p>〈例題 2〉 「野中古墳」からは多くの武器・武具・農工具が発見されました。このうち鉄鍬(鉄の矢じり)は約何個見つかっているでしょう？(藤井寺市)</p>
答え	約740個
ねらい	野中古墳の副葬品の点数の多さを実感してもらいたい。そして「なぜこんなに鉄製品が多いのか？」という問題について、興味をもってもらいたい。
クイズ	<p>〈例題 3〉 「応神天皇陵(誉田御廟山)古墳」はあるものの量が日本一の古墳です。それはいったい何の量で、どのくらいなのでしょう？(羽曳野市)</p>
答え	盛土の量/約143万m ²
ねらい	「日本一」というと大山古墳がイメージされがちであるが、古市の誉田御廟山古墳も別の指標で「日本一」であること、巨大な古墳は数多くあることを知ってもらいたい。
クイズ	<p>〈例題 4〉 「允恭天皇陵(市野山)古墳」は、同じ古市古墳群の中のある古墳に形がとてもよく似ています。その古墳は何という名前でしょう？(藤井寺市)</p>
答え	墓山古墳
ねらい	古墳に「相似形墳」が存在することを理解してもらった上で、先にみた墓山古墳との有機的な関係を理解し、複数の古墳をめぐる周遊見学に意味を持たせる。

3. 『古市古墳群クイズラリー』の制作

(1) 実施の動機

古市古墳群解説看板について挙げられた10点の指摘では、⑥のような子供の興味に関する点や⑦⑧のように地図やルートなどの立地上の問題が挙げられた。一方で、②③で挙げられたように解説看板のデザインやコンテンツの充実度は優れているとされた。

このような状況に対して、本研究では解説看板の活用策として「子供の興味を引く」「地図の活用」「解説看板のコンテンツに着目する」ことが有効と考えた。したがって、上記の方針をみたまものとして「古墳群を周遊するクイズラリー」を企画し、実施するに至った。

(2) 企画実施の方法

『古市古墳群クイズラリー』(以下「本企画」)は、「古墳群を周遊しながらクイズを解いていく」というものであり、対象としては主に子供や家族連れを想定する。クイズの答えを確認するものとして解説看板を活用することで、現地を訪れる人数の増加及び古墳や古墳解説看板に対する興味の増進が期待される。したがって本企画は以下のように参

ふるいちこふんぐん 古市古墳群クイズ

～めざせ！ふるいちマスター！～



のなかつちゅ◎

ふるいちこふんぐん ある 古市古墳群を歩いてクイズに挑戦しよう！こたえは看板にあるよ。

① 古市古墳群のまんなかにある「墓山古墳」の大きさは何メートルで古市古墳群の中では何番目でしょう？

② 「野中古墳」からは多くの武器・武具・農工具が発見されました。このうち鉄鏃（鉄の矢じり）は約何個見つかっているでしょう？

③ 「応神天皇陵古墳」は、あるものの量が日本一の古墳です。それはいったい何の量で、どのくらいなのでしょう？

④ 「允恭天皇陵（市野山）古墳」は、同じ古市古墳群のある古墳に形がととてもよく似ています。その古墳は何という名前でしょう？



のなかつちゅ◎

みんなは、いくつのこたえを見つけられたかな？
古墳の解説看板を探して、全問正解をめざそう！
全問正解できたら、“ふるいちマスター”だ！！

大阪大学考古学研究室
Osaka University
Department of Archaeology



2018年度2回生
自主研究グループ

図 49 作成した解説シート例（『古市古墳群クイズ』）

加できるものとした。

1. 紙面または Web 上に公開された周遊マップ（本研究で制作）とクイズを手元に用意
2. 現地を訪れ、問題を解きながら古墳群を周遊
3. 問題の答えを現地の解説看板で確認
4. 全問正解した参加者に「古市古墳群マスター」の称号を何らかの形で授与

（3）クイズラリーの問題とその答えについての詳細

本企画では4問のクイズ（藤井寺市の古墳に対して2問、羽曳野市の古墳に対して2問）を設ける。以下では問題とその答えとその意図を概説する。クイズはマイマップに設定したルート上に所在する古墳を対象とした。なお、個々の遺跡名に関しては解説看板の主大部分に記載されている名称を便宜的に採用する。

問題の難易度に関しては、「子供向け」かつ「解説看板に答えがある」という条件を満たすものという必要があるため比較的平易なものもある。そのため上記案は周遊ルートの再検討や実際に挑戦された見学者の方の動向を確認し、適宜難易度の変更や規模の縮小拡大を改めて検討したい。

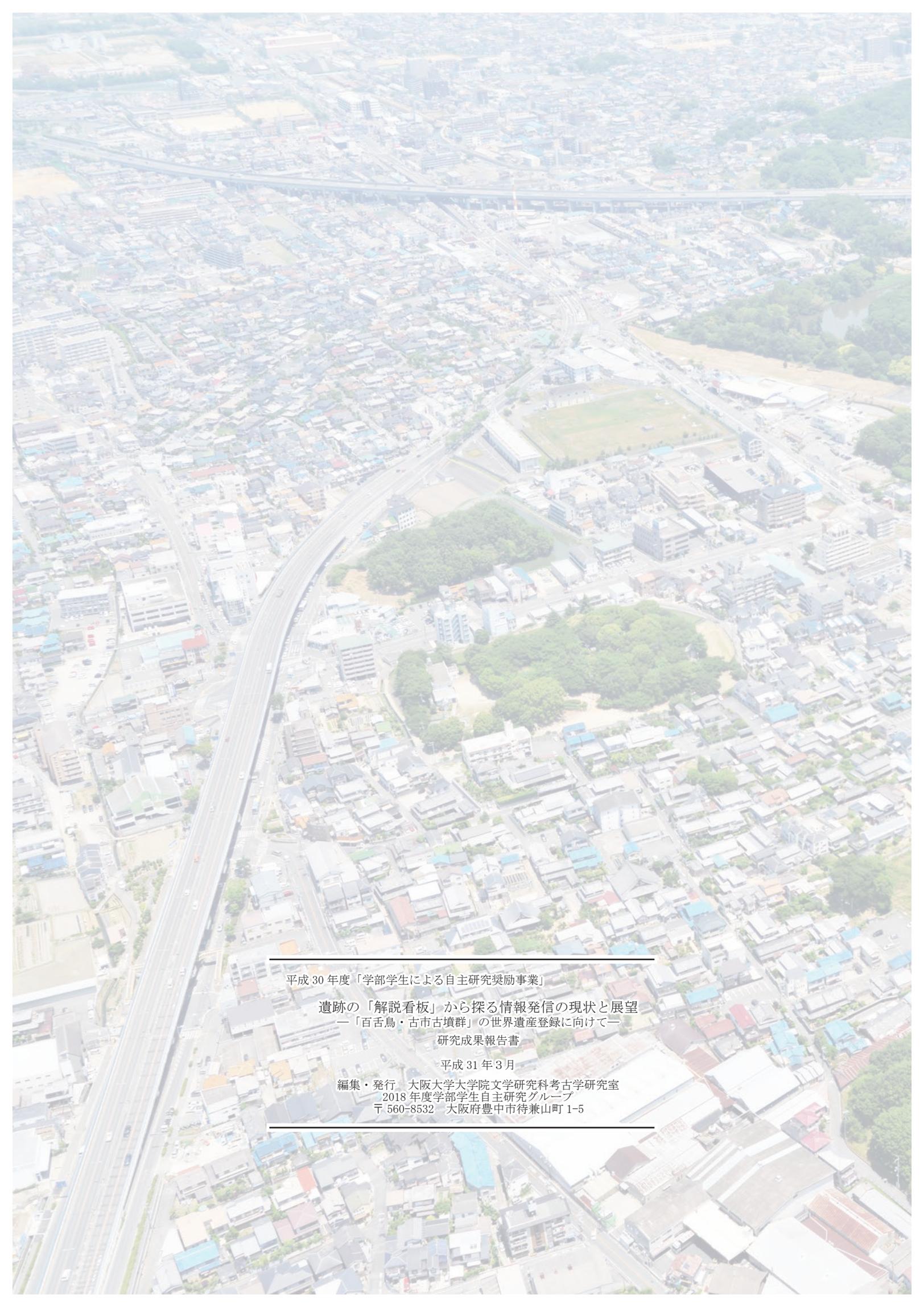
（4）結びに

本企画は主に古墳に対する興味の薄いと思われる子供や家族連れを対象に、解説看板のコンテンツを利用したクイズラリーを用いることで改めて興味を引き出すことを目的とする。また、現地を訪れなければ正確な答えが確認できないため、観光客数の増加にも一定の効果があると考えられる。実際に周遊することで知識を得られるという満足感と達成感が、世界遺産登録が期待される古市古墳群の理解と価値を高めることを期待したい。（神崎）

4. まとめ - 解説看板を活用する

古市古墳群は世界遺産登録に向けて近年新たな解説看板の整備が実施された遺跡である。その解説看板は文章・写真・図やデジタルコンテンツ技術を生かしたQRコードやアプリなどコンテンツに富んでおり、高い学習効果が期待されるものだ。一方で、解説の難易度や立地の問題などは、情報が多くの人に届くことを阻んでいると思われる面もある。上記の古市古墳群における解説看板活用の3種の具体案は、前者のような「評価すべき点」を活用し後者のような「問題があると思われる点」を解決していく目的で検討・実施された。こうした取り組みにより、これまで古墳や解説看板に対して関心の薄かった層や古墳の所在する地域に住む方々の興味や理解が深まり、古墳群の見学に訪れる人数の増加にもつながると考えられる。これらは、遺跡の保存活用や地域活性化に直接結びつくものである。本研究で提示を行った各試案が古市古墳群や地域に対してどのような効果や作用をもたらすのかはまだわからないが、遺跡の普及啓発のあり方について考えるきっかけとして、意義をもつことを願うところである。

今回検討・実施された解説看板活用の具体案は、これまでの本研究の現地調査および分析により導出されたものである。遺跡解説看板の今後の展望を具体的な形で示し、本研究のまとめとしたい。（我妻）

An aerial photograph of a city, likely Osaka, Japan. A major highway runs diagonally from the bottom left towards the center. To the right of the highway, there is a large green field, possibly a sports field or park, surrounded by university buildings and trees. The rest of the image shows a dense urban area with many residential and commercial buildings.

平成30年度「学部学生による自主研究奨励事業」

遺跡の「解説看板」から探る情報発信の現状と展望
—「百舌鳥・古市古墳群」の世界遺産登録に向けて—
研究成果報告書

平成31年3月

編集・発行 大阪大学大学院文学研究科考古学研究室
2018年度学部学生自主研究グループ
〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5
